

Jazz Today®

Monthly Free Magazine

2007.02 No.35



Grace Mahva

combopiano

**ESBJÖRN
SVENSSON
TRIO**

**Yuichiro Tokuda
Quintet**



<http://www.jazztoday.jp/>



Mahya

『DUG』の空気感を永遠に刻んで。

Grace



グレース・マーヤの新作に想う

text by JazzToday 編集部

先日の午後遅くのコト。テレビのリモコンを弄っていたら突然、マーティ・フリードマンの笑顔が画面に映し出されたので思わず見入ってしまった。(ヒット曲の)歌詞から学ぶ感情表現”を掲げるNHK教育の『ジュークボックス英会話』という番組の再放送だった。マーティ(元メガデス)と佐藤良明(東京大学教授)と中田有紀アナの3人がポップスの名曲を組上に感情表現の妙を分析しつつ、生きた英語を習得しようという主旨の番組。当日の課題曲は〈Without you〉のマライヤ・キャリー版で字幕付きのライヴ映像が紹介されたが、もしこんな英語の授業が実在したら日本人の会話力も数段アップするだろうと思わせる楽しいプログラムだった。加えて「もう一人、グレース・マーヤが参加したら完璧!」とも思った。なぜならば、英語・ドイツ語・フランス語に堪能であるという逸材性に加えて、彼女には「華」がある。愛くるしい「親しみやすさ」もある。さらにしかも彼女には自ら弾き語って歌詞の深さを伝えられる「平和の武器」がある。もし今後、同番組のスタッフが「スタンダード編」を画策するのであれば是非、本誌はグレース・マーヤを最有力候補に推したいと思う次第だ。

ところでマーティ・フリードマンといえば『ヘビメタさん』『ロックフジヤマ』への連続出演で老若男女を問わず、「ロックの愉しさ」を再認識させた陽気な伝道師ぶりが大いに評価できる存在だ。ジャズ界にもマーティ的な存在がいたら…という切なる願いは本誌前号でも綴ったが、グレース・マーヤの待望2ndアルバム『Last Live at DUG』を聴いていたなら、そんな「悲願」が「成就」の可

性能へと向かっている事実とふと気づいた。そうか、なにも日本語に堪能な親日派アーティストの出現を待つまでもなく、純国産にしてドイツ留学体験8年を数える実力派帰国女子シンガー兼ピアニストの彼女がいるではないか、と。

本誌は彼女のデビュー作『The Look Of Love』の取材記事(23号)を「グレース・マーヤ、大ブレイクの予感がする!」という言葉で締めしたが、新作を聴いた今はさらに「グレース・マーヤ、日本のジャズ界を塗り替える女神である!」という讃辞も追加したい。ロック界がマーティ・フリードマンという思わぬ伏兵を得て活性化が行なわれているのであれば、わがジャズ界にはグレース・マーヤというキュートな女神が出てきたぞ、と胸を張ろう。

その魅力については前述したとおりだが、さらに加筆するならば彼女には「撰ばれし者」特有の「運」がある。それはもちろん努力に裏打ちされた音楽的才能があればこそその「出遣い」という名の強運性なのだが、一時帰国中の(ピアノの腕を活かせる)アルバイトとしてジャズ・バーの扉を叩いたら「歌えるの?」と問われて、思わず「歌えます!」と即答したコトから今日のきっかけが生まれたという逸話も然り。そしてタイトルが物語るとおり待望の2作目は、昨年末に40年の歴史に幕を下ろした中平穂積店主の『DUG』における記念すべき最終ライヴ(2Days)を高音質収録し、一枚に厳選した内容というも新人としては異例中の異例と呼べる「抜擢」だろう。じつは筆者も2日目のライヴ・レコーディングに立ち会う機会を得た幸運な聴衆のうちの一人なのだ

が、なんと1日目には中平店主にも秘密で同店に縁のふかい日野皓正(tp)が突如現われ、〈Route 66〉の1曲だけに参入すると再び新宿の雑踏のなかへ消えていったというサプライズな演出もあったそうだが、このマーヤ伝説の一幕が新作の冒頭を飾っているの上記の逸話を思い浮かべて聴いてほしい。

そろそろジャズ(のブーム)が来るらしい、いや、既に来ているという風評が囁かれて久しいが、書店を覗けば確かにジャズ関連書籍の新刊類がそれなりに目立つ。が、正直いつまで経っても「入門」や「初心者ガイド」的なタイトル本ばかりが並ぶのは今日の音楽情勢を鑑みた場合にいかがなものかと思わざるを得ない。それは書き手の枕詞というか、それを想定しないと書き出せない「假想敵」のようなものにしか思えず、相変わらず「銀盤上のジャズ」だけを甲乙評価する趣味のお奨め本にしか過ぎないのではなからうか。しかも(ゆえに?)国内ジャズの過小評価(あるいは無視)ぶりは一向に変わらない。「ジャズはライブに限る!」と声高に叫ぶ気もないが、今聴ける、今日出遣える、自分の耳と心で評価が下せる機会(ライブ)に蓋をして「入門」もないと思うのがどうだろう。

生きている、現在進行形のジャズがどんなものか。新人ゆえの歌う喜び、ジャズの素晴らしさを共有する愉しみとは何なのか。新人らしからぬ一種の貫禄さえ秘めたグレース・マーヤの新作『Last Live at DUG』は、そんな初々さと臨場感あふれる親近性、出帆したばかりのニューカマーの可能性が全編に満載されている好盤である。「ジャズは何から聴いたらいいですか?」の回答としても推奨したい21世紀型的好サンプルだろう。

Last Live at DUG グレース・マーヤ

Village Music
VRCL-11004 (Hybrid/CD&Super Audio CD)
¥2,940(税込) 2007/2/28 RELEASE



JAZZ 史に燦然と輝く“DUG”でのラストライブを務めた歴史的パフォーマンスを収録。奇跡的に集ったメンバーと繰り出される“恍惚の夜”。歓びや哀しみをすべて包み込んだ感動の終焉部…。

- | | | | |
|---------------------|----------------|-------------------|--------|
| 01. ルート66 | 04. キッス・オブ・ライフ | 07. カミン・ホーム・ベイビー | 10. 追憶 |
| 02. ムンライト・イン・ヴァーモント | 05. モナ・リサ | 08. ティーチ・ミー・トゥナイト | |
| 03. 素敵あなた | 06. 私の心はハバのもの | 09. サニー | |
- パーソネル
 グレース・マーヤ (Vocal,Piano)
 日野皓正 (Trumpet)
 村岡 健 (Sax,Clarinet etc)
 小沼ようすけ (Guitar)
 日野 “JINO” 賢二 (Electric Bass)
 鳥越啓介 (Acoustic Bass)
 河野啓三 (Keyboards)
 坂東 慧 (Drums)

グレース・マーヤ Live Info

- 2月20日 横浜 KAMOME
- 2月25日 新宿 who's who (Ex.DUG)
- 3月2日 六本木 Alfie
- 3月8日 新宿 TOPS BAR
- 3月25日 新宿 who's who (Ex.DUG)
- 3月29日 渋谷 JZ Brat
- 3月30日 横浜 KAMOME
- 4月16日 新宿 who's who (Ex.DUG)
- 4月27日 横浜 KAMOME
- 5月19日 青山 Body & Soul

★ Official Web Site (www.gracemahya.com) にて最新 Live 情報をご覧ください!



フィードバック≡弦楽四重奏

interviewd by JJazz.Net
Photo by 平野太吉



JJazz.net : 今回の新作『Growing Up Absurd』ですが、早、何枚目？

Combo Piano : eweに来てから5枚目かな？

J : だいぶ、印象としてはサウンド変わりましたよね？

C : 成熟してきました？ (笑)

J : (笑) どんな流れで今回のようなサウンドになったんですか？ 今までのコンボピアノの

ファンからするとびっくりするような変化ですよね。わかりやすく言うとロックというか、

それまではどちらかというとインテレクチュアルなイメージがありましたよね。

C : そうみたいですよねえ。譜面でも破って口にくわえるパフォーマンスとかやったほうがいいんじゃないかという (笑)、「楽譜派」とかね。でも、基本的にやってることは変わ

らないんですよ。今回は楽譜は全然使ってないんですけどね。

J : 今回はポップというか、曲の構成がはっきりしている印象があるじゃないですか。どんな感じで (制作は) 進めてたんですか？

C : ギターのフィードバックを採集するところから始めて、別に昆虫じゃないですけどパンパン録って。(録音を) やるときはガーッ



combopiano

とやるわけですよ。で、次の日にものすごい大爆音で録ってたものをリプレイするんだけど、もちろん同じような大爆音では聴かないわけ。たとえば3つくらいギターのフィードバックを小さいレベルで聴いてみるとほとんど弦楽三重奏とか四重奏とかに聴こえてくるわけ。それはなんか面白いなあ、と。かといって、そこに自分のエモーショナルなものとか、バイオレンスなものとか、そういうものが全然映り込んでないってわけでもなくて。後は元来、ピアノってわりとリミットがある楽器で。音量的に。ギターなんかドンドン爆音に出来るわけ。その楽器で自分の中の鬱屈したものとかを表現しようとした時にガンガン、ピアノを張り倒すような演奏を、セシル・テイラーとか、まあセシル・テイラーがそういう演奏だとかは別にして (笑)、(そういう演奏を) やっても (自分の中の音楽が) 生成されないじゃないかと。それよりもピアノを使って、そういうことを表現するならば、たとえば一音だけ使ってさ、ただポツンポツンと延々5時間くらい弾いてるとかのほうが、何かこうイマジネーションの中でだんだんと自分の中で発露してくるものがあったりする。ただそれは自分の中ではわかっていることでも、リスナーにとってはただの破綻した実験音楽にしか聴こえてないわけ。それはつまらないな、と。それを良い形でトランスレーション出来る方法はないのかなと思って、ギターのフィードバックっていう。もちろんロックっていうジャンルに対しての希求する何かっていうのは、ずいぶん前からあるけれども (制作の) スタートにあったものはすごく観念的なものをどうやって具現化するかっていう過程にギターが出てきて、それがだんだんロックって形に生成されていってという。

ここに内田さんが言葉をつけるんだけど、それまではリリックとかいわゆる意味性とかメッセージにしても、あんまり強く意識したことも無かったし、そういうことを大っぴらに「オレはこんなメッセージをもって音楽をやってるんだぞ」って言ってきたことも無かったけど、自分たちの作った音楽に内田さんが詩を書いて、それには凄く整合性があるって、彼女はイマジネーションも素晴らしいので「この音楽に対してはこの言葉」っていうのを伝わりやすく形にするのが上手いわけですよ。で、出来上がった曲を聴いてみて、大きなメッセージでは無いんだけど、すごく些細なこと、俗な言い方だけど日常とかさ、そういうところで感じる孤独感であったりとか、そういうことを自分も意識してモノをつくらうかな、と。そういう意味で音楽にしてもそうだし、音楽の作り方とか、作曲の手法とかも変わったかもしれないですね。

J : 今回はDrにジョン・マッケンタイアが参加していますが。もともとトータスが格別好きってわけじゃなかったとか。

C : やっぱり食わず嫌いなんで (笑)、あと「ポストロック」って名前がちょっと抵抗あるでしょ (笑)。そういうところで音楽聴いちゃいけないと思うんだけど、やっぱり先入観としてあったんで (笑)。でも実際、彼がドラム叩くところを見たりとか、あとトータス以前のたとえばバストロっていうバンドとかシー&ケイクの初期の頃なんか聴くと、ホントにパンクロックのハードヒッターで勢いのあるドラマーっていうところがある。最初はクールの人なのかなって思ってたのが、トータスのライブで彼の演奏をみて良いなあと思って。今回のアルバムでのフィードバックの曲を書いて音が形に成っていくとロックだったんですね。なんだけど、やっぱりコンボピアノ的なロックというか、ある程度、演奏の表現仕方はロックンロールでもいいんだけど、もっと間口が広い部分が必要だろうなってところまでマッケンタイアってパツと出てきて。最初は淡泊な感じで総合力という点でいいかなと

Growing Up Absurd /combopiano



SYCAMORE Records
EWSY-008 ¥3,000 (税込)
2007/2/14 RELEASE

- 01. The Day Wavers
- 02. Sun at Night
- 03. Love of jockey never dies
- 04. Actual Air
- 05. Chain Reaction
- 06. All Gone Crazy Now
- 07. Green Light
- 08. Piano

- パーソネル
- Emmett Kelly
 - John McEntire
 - Brandon Ross
 - Takuji Aoyagi
 - Yayako Uchida
 - Bibi
 - Mark Borthwick
 - Teddy Jefferson
 - Yuta Segawa
 - Takuma Watanabe

三者三様の 「三位一体」鑑賞記

e.s.t. LIVE IN JAPAN 2007

1月13日(土) @東京・渋谷 Bunkamura オーチャードホール

取材協力：鯉沼ミュージック
撮影：@suetsugu



スカンジナビアの地で見られるという Midnight Sun の淡い光にも似て舞台を照らす薄く冷たい照明は夢と現の狭間を映し出す。〈tuesday wonderland〉で始まった e.s.t. の東京公演は、オーチャードホールの広い舞台の中心の浮島にボツと置かれたかのようにグランドピアノとベース、ドラムセットが配置され、ステージ後方の幾何学的なセットが照明に映し出されるというシンプルなものだった。

マグナス・オストロムは凍てついた空間を静かに刻む時のように繊細なブラシワークで地平を広げ、ダン・ベルグランドは静寂の中にも確かに息づく鼓動のようにベースを弾く。エスビョルン・スヴェンソンの左手の刻むリズムは冷たく凍った大地に重く沈む空気のように響き、右手の旋律はその重力を振り払いやすかな不安にピンと張られた緊張感を美しく長い指でほぐし、可憐なメロディを紡ぎだす。エフェクター

と PA が歪ませる音像と次元は、暗闇と光の狭間に存在する異界の入り口へと誘い、思考は深く研ぎ澄まされていく。もしかすると〈Dolores in a shoestand〉で我慢しきれずに踊り始めた若者たちは、低くピンと張り詰めたテンションに少し途惑ったかもしれない。しかし、かつてプログレッシブ・ロックに心を奪われ、その音の先にまだ知りえない世界を



感じ、僅かに開いた扉の前で息を詰まらせた世代の私は e.s.t. の構築する世界の糸口を探すの

にいつしか夢中になっていた。

(MOONKS 白澤茂稔)

冷たい月の光のようなスポットを浴びたベルグランドのベースソロ、オストロムの正確にそして冷酷に時を刻むドラミング、氷河の瓦解のようにカタルシスを生むスヴェンソンのフレーズ。すべてを弾き終えたスヴェンソンの微笑は世界を啓示し終えた神のようだった。

不味い、e.s.t. というユニットの提示する世界観に少しトランス状態に陥ったかもしれない。

世代のピアニストの活躍が目まぐるしいけれど、e.s.t. はまさにその頂点に立つ存在だ。93年に結成されて以来、いまだに進化・発展を続けている e.s.t. の目覚ましい成長ぶりを、ぼくらはザ・シナジー・ライブ 2003 の初来日以来、04年、05年、そして今年で4回目を迎えるステージで目の当たりにしている。

世界で最も注目されている e.s.t. を定点観測出来る嬉しさは格別だ。今度はいったいどんなサウンドを体験させてくれるのだろうか？ 1月13日午後6時、渋谷 Bunkamura オーチャードホールの緞帳が上がると同時に音色が弾かれ、文字どおりめくるめく刻の軌道を自在に描きながら聴衆の胸に瞬間々々音々々織り込まれていった感動をどう言葉で再現すればいいのか。正直、迷う。個々人の事情がどうであれ、その場に立ち会わなかった方々に「どうだった？」と尋ねられても、言葉での御裾分けはどこか虚しさが伴う。さながらブルースの文体を連想させたとか、音楽版「映像の20世紀」みたい



だったのだ、短焦点あり望遠あり魚眼あり時には複眼さえも感じさせて不可視のものが幻視できるようなステージだった…などといふ比喻や讃辞をいくつ重ねても当夜、あの会場で体験したもの(者)の深みには到底及ばない。ガガーリンの観た地球の青ささ脳裡を掠めた、と唇が戯れても総てが「後付け」の印象に他ならない。通算4回目となる e.s.t. の来日公演、その全てを鑑賞してきた者の実感としては「今までで最高の演奏会だった」と、世界中の評価と称賛を浴びながらどこまでも真摯に追求と経験を重ねる彼らの確かな深化ぶりを端的に証言する以外に術がない。あるいはジャズ好きな先進国中、「美しい日本」を目指すはずのわが国における自称ジャズ・ジャーナリズムがかつて、(今回の来日事前情報にしても)いかほどの紙幅を割いてきたのかをいえば、その総面積はおそらくタタミ一畳ぶんにも満たないのでは!? と想像われ、その過小評価ぶりといふか何かの事情が作用しているに違いないと思わずにはいられない後進国度はダントツ1位だろう。閑話休題。昨夏から我が仕事場の近くを流れる江戸川の河川敷を1日10キロ、ウォーキングするのを日課として以来、iPod のシャッフル再生が1時間

スヴェンソンの奏でる美しいメロディーとドライブ感、3人の緊迫感あふれるインタープレイ、時折、効果的にとり入れられたエフェクターやアタッチメントが、彼らのサウンドの幅を大きく広げ、ロックの洗礼を受けた新しい世代が奏でる現在進行形のジャズを堪能させてくれる。そして、彼ら3人の、否、じつは PA エンジニアのリントンを加えた4人で創り上げるグループ・サウンドは、年を追うごとに緊迫感の度合いを増している。これほど満足度の高いコンサートに

今年これから出会えるのだろうか？ と、思わせるほど素晴らしかったにもかかわらず、空席が目立ったことだけが心残りだった。

(ピンポイント 磯田秀人)

彼らの代表作のひとつに〈美しきベールの裏側〉といふ詩情満載の曲がある。ではあの夜、ホールの緞帳が上がると同時に音色が弾かれ、文字どおりめくるめく刻の軌道を自在に描きながら聴衆の胸に瞬間々々音々々織り込まれていった感動をどう言葉で再現すればいいのか。正直、迷う。個々人の事情がどうであれ、その場に立ち会わなかった方々に「どうだった？」と尋ねられても、言葉での御裾分けはどこか虚しさが伴う。さながらブルースの文体を連想させたとか、音楽版「映像の20世紀」みたいだったのだ、短焦点あり望遠あり魚眼あり時には複眼さえも感じさせて不可視のものが幻視できるようなステージだった…などといふ比喻や讃辞をいくつ重ねても当夜、あの会場で体験したもの(者)の深みには到底及ばない。ガガーリンの観た地球の青ささ脳裡を掠めた、と唇が戯れても総てが「後付け」の印象に他ならない。通算4回目となる e.s.t. の来日公演、その全てを鑑賞してきた者の実感としては「今までで最高の演奏会だった」と、世界中の評価と称賛を浴びながらどこまでも真摯に追求と経験を重ねる彼らの確かな深化ぶりを端的に証言する以外に術がない。あるいはジャズ好きな先進国中、「美しい日本」を目指すはずのわが国における自称ジャズ・ジャーナリズムがかつて、(今回の来日事前情報にしても)いかほどの紙幅を割いてきたのかをいえば、その総面積はおそらくタタミ一畳ぶんにも満たないのでは!? と想像われ、その過小評価ぶりといふか何かの事情が作用しているに違いないと思わずにはいられない後進国度はダントツ1位だろう。閑話休題。昨夏から我が仕事場の近くを流れる江戸川の河川敷を1日10キロ、ウォーキングするのを日課として以来、iPod のシャッフル再生が1時間



半の行程を励ましてくれている。e.s.t. の音源は ACT 時代から最新作まで全曲がインポートされているから、チョイスされる機会も自然と多い。たとえばキリンジの〈まぶしがりや〉とデヴィッド・ボウイの〈ヤング・アメリカン〉の合間に、彼らの〈グッド・モーニング・スージー・ソーホー〉が唐突に挟み込まれて、その想定外の流れに思わず笑みをこぼしたりもする。そして彼らが母国のヒットチャートでマドンナやレディオ・ヘッドらと順位を競ったといふ逸話が実感として浮かぶのは、そんな瞬間である。が、iPod の恩恵はあくまでも流れる風景の BGM のようなもの。当夜の生演奏はむしろ様々な風景を陽炎のように現出させては爽快に消え去った。凄かった。

(本誌編集長 末次安里)

e.s.t.

東京公演セット・リスト

日時：2007年1月13日(土)
開場：17:00 開演：18:00
会場：東京・渋谷 Bunkamura オーチャードホール

1st set

1. Tuesday Wonderland
2. Mingle In The Mincing-Machine
3. The Goldhearted Miner
4. Definition of Rock

2nd set

1. Eight hundred Streets By Feet
2. Brewery Of Beggars
3. Beggar's Blanket
4. Dolores In A Shoestand
5. Where We Used To Live

Encore

6. Goldwrap

Keith Jarrett/Gary Peacock/Jack DeJohnette JAPAN TOUR 2007



〈東京公演〉
2007年4月30日(月・祝) / 5月8日(火)
会場 ▶上野・東京文化会館 大ホール
2007年5月10日(木)
会場 ▶新宿・東京厚生年金会館
開場 ▶18:00 開演 ▶19:00
料金(税込) ▶SS席 12,000円 S席 10,000円 A席 8,000円
(SS席は鯉沼ミュージックのみの販売)
出演 ▶キース・ジャレット(ピアノ)
ゲイリー・ピーコック(ベース)
ジャック・ディジョネット(ドラムス)

*未就学児童のご入場はご遠慮願います。
チケット発売 ▶2006年9月30日(土)
企画制作・問合わせ ▶鯉沼ミュージック 03-3404-6890
<http://www.koinumamusic.com>
チケット発売所 ▶鯉沼ミュージック 03-3404-6890
<http://www.koinumamusic.com>

その他、チケットぴあ、CNプレイガイド、ローソンチケット、イープラス、楽天チケットで取り扱い。4/30及び5/8公演のみ東京文化会館チケットサービスでも取り扱いしています。

〈大阪公演〉
2007年5月3日(木・祝)
会場 ▶大阪フェスティバルホール
開場 ▶18:15 開演 ▶19:00
お問合せ ▶キョードー大阪 06-6233-8888

〈横浜公演〉
2007年5月6日(日)
会場 ▶神奈川県民ホール
開場 ▶18:00 開演 ▶19:00
お問合せ ▶KMミュージック 045-201-9999

ジャズ



本欄のタジマ画伯が渾身の表紙で故人を悼む。アリス・コルトレーンは…胸中で合掌しよう。

今月号は「マイケル・ブレッカー追悼」の企画が2本、伊藤八十八氏による新連載の1回めと、

連載 12

絵と文
タジマヤスタカ



ザ・クォータ
ジミー・ヒース

今月の表紙はブレッカー・ブラザーズ。あの糸乱れぬカッコいいアンサンブルもマイケルのテクニカルながらもぐるぐるとうねるようにドライブするあのソロももう聴けなくなつちやつたんですね。合掌。
さて、こちらも兄弟絡みで3枚。まずはヒース3兄弟揃い踏み。リーダーは真ん中のジミーちゃん、地味〜だけど滋味ある演奏を聴かせてくれます。しかしこの人はホント

真面目な感じなソロで朴訥と言うかボキボキというか…。対称的に奔放なプレイを聴かせる若き日のハーバードが印象的。

フレディー・ハーバード(tp)、ジミー・ヒース(ts)
ジュリアス・ワトキンス(frh)
シダー・ウォルトン(p)、パーシー・ヒース(b)
アルバート・ヒース(ds) 1961年



モダン・アート
アート・ファーマー

ジョーンズ、アダレイ、タレントイン…。日本でも渡辺、日野…。兄弟プレーヤーって結構多いですね。中でも双子ってのがちょっとちょっと珍しいファーマー兄弟。
このアルバム、時流に乗ってなのかファンキー調に始まるのですが、なんか曲想で演出されたごちんまりファンキーさに違和感ムズ。それよりもやはり耳に残るのは〈ターン・ザット・ドリーム〉などで聴かれるファーマー

ーという実のあるトランペッターの巧みさ、美しさ。この後も半世紀に渡ってこの持ち味を練り上げていくわけで、凄いですね。

アート・ファーマー(tp)
ベニー・ゴルソン(ts)
ビル・エバンス(p)
エディソン・ファーマー(b)
デイヴ・ベイリー(ds) 1958年



キーストーン3
ジャズ・メッセンジャーズ

現代で兄弟と言えはやはりマルサリス兄弟でしょう。なんだかんだでブランフォードも年々妻みを増してるし、何かとしゃら〜さいウイントンですが当時20歳そこそこでこの鮮やかさはやはり変え。
この頃のメッセンジャーズはオリジナル曲も少なく70年代のメッセンジャーズをそのまま踏襲した感じでバンドとしての新味はあまりありませんが、雰囲気は洗練された感

じ。プレイキーの幅広いレンジで押したり引いたりドラミングが絶妙。

ウイントン・マルサリス(tp)
ブランフォード・マルサリス(as)
ビル・ピアース(ts)
ドナルド・ブラウン(p)
チャールズ・ファンブロー(b)
アート・プレイキー(ds) 1981年

音楽の息づく場所。

text by hanao (JJazz.Net) vol.8

つい先日、母の故郷、熱海に行ってきた。

母に連れられ、彼女が30年ほど前に通っていたというジャズ喫茶を訪ねました。狭い店内にはぎっしりとレコード類が並び、壁にはポスターや写真やステッカーが所狭しと貼付けられ、天井にはウッドベイスが、その時にかかっていたのは、モックの『5th Monk』。

そのジャズ喫茶のママは、30年ぶりに顔を出した母の名を、きちんと覚えていたほどの驚愕の記憶力の持ち主。いろいろとお話をしていくうちに、このお店にはジャズミュージシャンも足繁く通っていることが判明しました。本当にさぞんまりとした、うっかりすると見逃してしまいうるような佇まいなのにも関わらず、40年以上もの間、ひそやかに、しかし確かに音楽が息づいている。

数年前、ジャズ喫茶、と呼ばれる場所に初めて足を踏み入れたときの緊張感は、今でもありありと覚えています。ライヴハウスとも異なるその雰囲気には、どこか秘密めいた、そして真剣なものがありました。音に意識を集中する行爲。

「若いときにここに来てくれたお客さんがね、子供たちみたく話をしてきてくれた。ふらっと若い子が来たかと思うと、誰その息子です、とか自己紹介してくれたりして。まだまだ元気ががんばらなくちゃあね。」

そう言っ、ざっと計算した年齢よりも遙かに若々しいママはこころと笑います。確かにここは、伝えたい場所であるかもしれない、と思いましたが、「音楽を生み出す人は、音楽を愛している」と改めて感じました。或は、「音楽を愛している人の生み出す、音楽を聴きたい」。もちろんわいわいがやがやと騒ぐ場所ではありませんが、こういう場所の楽しさを、大切な人と分かち合いたいと願っています。

大切なものに出会うために。JJazz.Netの、このキーフレーズが頭によみがえりました。またひとつ、大切なものに出会えたこと、これはちょっとしたミラクルです。

internet radio station JJazz.Net Japan Jazz Network

月額1,050円の会員サービスでは約4ヶ月分のアーカイブ、常時約500曲が聴き放題

www.jjazz.net

Roberta Gambarini



ロバータ・ガンバリニ・イン・ニューヨーク

文・写真：藤岡靖洋 (ジョン・コルトレーン研究者)



ニューヨークで話題の中心、ロバータ・ガンバリニ

今年初頭、ニューヨークで最も注目を浴びていたミュージシャンは、期待の超新星ロバータ・ガンバリニ。イタリア、トリノ出身の彼女は55レコードからのデビュー作『イージー・トゥ・ラヴ』で、いきなり日本のスイング・ジャーナル誌ディスク大賞を受賞。さらにアメリカのグラミー賞にもノミネートされるなど、いまや世界中から注目を浴びるディーヴァとなってしまったからたい



Track 1-10 2005年9月27日 ニューヨーク、メトロ・スタジアムにて録音
Track 11-14 2006年7月8日 イタリア、ウンブリア・ジャズ・フェスティヴァルにてライブ録音。
ミックス：アル・シュミット (キャピトル・スタジオ)

第49回グラミー賞ノミネート

イージー・トゥ・ラヴ
ロバータ・ガンバリニ



55 Records FNCJ-5511 ¥2,500(税込)
2005/11/23 RELEASE

エラ、サラ、カーメンの再来！
ついに現われた究極のジャズ・シンガー！
堂々のデビュー・アルバム。


01. イージー・トゥ・ラヴ
02. オンリー・トラスト・ユア・ハート
03. ラヴァーマン
04. 明るい表通りで
05. ボーギー&ベス・メドレー
06. 恋人よ我に帰れ
07. トゥー・ロンリー・ビーブル
08. センターピース
09. ガス・アイル・ハンズ・マイ・ティーズ
10. ノー・モア・ブルース
11. 煙が目にしみる
12. トゥー・レイト・ナウ
13. マルチ・カラード・ブルー
14. モンクス・ムード
〜ルッキングバック

■パーソネル
ロバータ・ガンバリニ (vo)、
ジェームス・ムディ (ts, wo -
3.8)、タミール・ヘンデルマン (p
- 2以外)、ジェラルド・クレイ
トン (p, 2のみ)、ジョン・クレイ
トン (b - 2.3, 5.8, 11)、チャック・バ
ゴファアー (b - 1.4, 6.7, 9, 10, 13, 14)、
ウィリー・ジョーンズ III (ds -
1, 2, 3, 5, 8, 11, 14)、ジョー・ラバ
バラ (ds - 4, 6, 7, 9, 10, 13)

アル・シュミット (録音&ミックス)
2004年6月18, 19日 L.A. キヤ
ピトル・スタジオにて録音。

ラッシュ・ライフ
ロバータ・ガンバリニ & ハンク・ジョーンズ

巨匠、ハンク・ジョーンズを迎えて、ファン待望の夢のコラボレーションが実現!



55 Records FNCJ-5519 ¥2,500(税込)
2006/12/20 RELEASE

01. ユー・アー・ゼア
02. アイル・ビー・タイアード・オブ・ユー
03. ホエン・ライツ・アー・ロウ
04. ティープ・パーフル
05. レミツツング
06. サバタイム
07. ジャスト・スクイズ・ミー
08. サムシング・トゥ・リヴ・フォー
09. スターダスト
10. ラッシュ・ライフ / 11. スカイラーク (ライブ)
12. ボディ・アンド・ソウル (ライブ)
13. クール・ブリーズ (ライブ)
14. ラッシュ・ライフ (ライブ)

■パーソネル
ロバータ・ガンバリニ (vo)
ハンク・ジョーンズ (p)
ジョージ・ムラーツ (b) on 12-14
ウィリー・ジョーンズ III (ds) on 12-14

へんだ。その彼女が1月ニューヨークでIAJE (国際ジャズ教育者協会) 年次総会でヒルトン・ホテルの『グランド・ボールルーム』で美貌と美声を披露したのに続き、16日から一週間『ブルーノート』へ、さらにその後マンハッタンで最も美しいホールとして2004年10月の開館以来話題となっているJ@LC (ジャズ・アット・リンカーン・センター) の『ローズ・シアター』へも出演。今、最も忙しいミュージシャンの1人となって活躍を続けている現場へ急行。彼女を追ってほくは単身ニューヨークへ飛び、「フォナ・セラ (こんばんは)」の挨拶。昨年7月イタリア、ペルージャで開催されていたウンブリア・ジャズ2006ではジャズフェスの期間中一週間連続公演、11月の来日全国縦断公演、そしてIAJE年次総会という大舞台の連続で、しかもそれら大ホールで聴いてきた彼女の魅力とはまた違う一面を覗かせるニューヨーク『ブルーノート』での様子をここでレポートしてみましょう。

ロバータの聴っぽさ120%全開

ひとこと言っ彼女の魅力はイタリア女性特有の「天真爛漫な明るさ」。舞台を見ればその明るいトークと微笑みにつられてついこちらもニッコリしてしまう。ジャズ・クラブ特有のインティメイトな雰囲気の中、至近距離で聴くロバータに期待は膨らむ。



フォアキャスト：トゥモロウ ウェザー・レポート

ディスク：1
01. イン・ア・サイレント・ウェイ / 02. スーパー・ノヴァ
03. イクスベリエンス・イン・E (抜粋) / 04. ミルキー・ウェイ
05. ティアーズ 06. コリディス (FULL VERSION) / 07. オレンジ・レディ
08. アン・ウン・ソルジャー / 09. ディレクションズ (テイク 1)
10. スルク / 11. セカンド・サンデー・イン・オーガスト
12. 125丁目の出来事

ディスク：2
01. ヌビアン・サンダンス / 02. ブラックソーン・ローズ
03. パティアの楼閣 / 04. キャンボール / 05. ブラック・マーケット
06. スリー・クラウンズ / 07. ハヴォナ / 08. ハドランド
09. パラディウム / 10. 貴婦人の追跡 / 11. 親のない子
12. サイドシーイング

ディスク：3
01. ドリーム・クロック 02. スリー・ビュース・オブ・ア・シークレット
03. ポート・オブ・エントリー / 04. ダラ・ファクター・トゥー
05. プロセッション / 06. プラザ・リアル / 07. サ・ウエル
08. Dトワッツ / 09. ドミニ・セオリー / 10. プレター
11. フェイス・オン・ザ・バーナム・フロア
12. インディスクレクションズ
13. 125丁目の出来事 (DJ ロジック・リミックス)

摩滅せず、褪せることもなく。

メジャー・レーベルでビッグネーム、しかも70年代中心である。特にここで触れなくても良さそうなものだが、山下邦彦の力作『ウェザー・レポートの真実』(リットーミュージック)も出版されたので、敢て。そもそも、ウェザー・レポートに熱狂的に入れあげたことはない。距離をおいて何枚かのアルバムに親しんだという程度だ。だが、このボックスに収められた3枚のCD、1枚のDVDに触れ、さらに山下本を読むにつれて、あらためて気づくことが多々あった。つくり手の語ることは本来さして重視しない立場をとっているのだが、それが自己満足ではなく、結果としての音に現われているの気づくことができるなら、それはときにしっかりとした読解格となる。

冒頭におかれたのはマイルスの参加している〈イン・ア・サイレント・ウェイ〉。そうか、ここをウェザー・レポートの始点とするか。これも含めて、ウェザー・レポート「以前」が3曲収録されているところにも、「歴史」を見渡すつもりとした視点がある。

一種のベスト盤ともいえる内容ではあるが、ライブ演奏も多く、さらに音質、画質がいい。

70年代から80年代前半、その「時代」の色やスタイルとシンクロしながら、サウンドが変化してゆく。

それでいながら、それ「以上」の摩滅しないものがあり、「古典」や「軌跡」としてとどまることなく、「いま」でも褪せることがない。ジョー・ザヴィヌルとウェイン・ジョーターは不動だが、他のメンバーは変わってゆく。それによってときに細部が変わり、ときに全体が変わる。耳をどこに向けるか、微視的になるか巨視的になるか一徹聴的/巨聴的?によって、サウンドが、いや、聴き方が変わる。何がおもしろいといつても、もちろん音楽の進行そのものなのだが、瞬間瞬間の音のつくり、テクスチャが、聴けば聴くほど、なのである。

ザヴィヌルは、自ら弾いてみた「即興」をそのまま録音し、テープを聴いて楽譜にしたという。もともと即興だから即興のように聞こえるのは当然だと言いつつ、方々ザヴィヌルはするのだが、どうしてどうして。即興にあった新鮮さは、ひとに伝えられた段階で失われてしまうのがふつう。そうならないことこそが稀有なのだ。そうした「即興=作曲」をそのまま複数のミュージシャンが演奏し、即興であるかのようにひびかせてしまう、そのみごとな「演奏=身体/媒体」がウェザー・レポートにはほかならないのだ。



text by 小沼純一 連載 vol.13



© NAMI OGATA

Jazz of LIFE シカゴと夜と音楽と 連載 vol.11

Keep On Smiling

text by 尾形奈美

<http://www.chicagojazzphotos.com>

写真は瞬間の出来事を記録する、って言い切っても異論を唱える人はあまりいないと思う。でも、写真が始まったのはジャズが生まれる100年くらい前のことで、当時のカメラでは露光に8時間、それから10年後に開発されたダゲレオタイプって技術でも数分から10分はかかった。つまり、一瞬を捉えるどころか被写体が何分間もじっとしてなきゃいけなかった。それが、ありがたいことに今じゃ、何千分の一

秒まで記録できる。技術さまざま。しかし、写真って、瞬間を記録するけど、目の前にあるものしか記録できないのよね。当たり前前だけ。

シカゴのジャムセッションによく歌いにやってくるSteve Trimbleという黒人の小さなおじいちゃんがいる。実は1930年代、のちに黒人コメディアンの大人物として有名になったレッド・フォックスと一緒に「ウォッシュタブバンド」というバンドを組んでいたベーシストで、70年代には、レッドを一躍有名にした。NBCの番組にも出演していたことがある。スティーブはいつもトップハットにスーツ姿でニコニコ現われ、酔い心地のスティーブが歌い出すだけで、クラブの空気が和んだ。ハッピーを絵にしたようなおじいちゃんだったのだが、結局、私はスティーブにカメラを向けられないまま、彼は他界してしまった。今になって後悔することだが、ある日、彼がめずらしくトロピカル・デンに現われたので、一緒にカウンターで飲んでいたら、バーの後ろの鏡越しに自分たちが映っていたので、ふざけてシャッターを切った。引き伸ばして出来た写真はピンボケだった。後で、あれがスティーブが入院する前日だったことを知り、みんなにお別れをしに来てたのだと思ったが、どんなに技術が発達しても、もう彼の姿は写せない。唯一彼が残したアルバム『Keep On Smiling』を聴く時、私の脳裏にだけ映るのである。——写真は、年輩者が多いトロピカル・デンで演奏に熱狂する女性。

第10回 Impression of Tristano

文&カット 平井庸一



ダブル・ベース (1)

前回はピアノの都築猛がバンドをやめてしまった(筆者注: 都築猛が脱退したのは2001年頃のこと、2004年には復帰しています)という話でした。

ところで都築さんが脱退する前のことですが、確か1~2回、ベースを2本入れたセブテットでライブをやったことがありました(もうボケ始めたのか、前回の原稿を書いた時点では忘れていました)。きっかけはトリスターノ派のベーシスト、ピーター・インドが自主レーベル「WAVE」に残した何枚かのアルバムでした。『Peter Ind Sextet』『Jazz at the 1969 Richmond festival』には、もう一人のベーシスト、Bernie Cashが参加し、2ベース編成になっています。また、2枚のLPをカップリングしたCD『Looking out - Jazz Bass Baroque』では、予め録音しておいたベースラインとドラムの上にベースソロを倍速でオーバーダブ(『鬼才トリスターノ』)の同様のアプローチがこれが元ネタだそうです)したり、ベースのみを複数回オーバーダブして演奏したりして

います。

ベースソロのバックにベースラインが流れていたり、二人が同時にウォーキング・ベースを刻んでいたりする気持ち悪いサウンドが気に入ったため、自分のバンドにも、もう一人ベーシストを呼んで、海道君との2ベースでライブをやってみた訳です。なかなか面白かったものの、その時は、ただ2ベースのサウンドを試してみたかったというだけだったので、すぐにもとのベース1本の編成に戻してしまいました。

ピアノが抜けてしまった後、今後のバンドの方向性を考えるために、前述したピーター・インドのアルバムを含む様々なトリスターノ関連のレコード・CDを聴いていた時、2ベースで演奏したことを思い出しました。「前に試した時はすぐにやめてしまったが、もう一度ベース2本でのアンサンブルを追求してみたら面白いんじゃないだろうか…。ピアノがなく



なった分のサウンドの薄さも解消できるかもしれない…」と思い、翌月のピットインでのライブから、新たに2サックス、2ベースのセクステット編成で再出発することになりました。

—この項、続く—

LIVE スケジュール

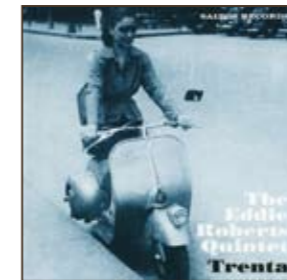
●2/20(火) 新宿ピットイン 昼の部
平井庸一(G)、都築猛(P)、増田ひろみ(As)、橋爪亮吾(Ts)、海道雄高、蛇子健太郎(B)、竹下宗男(Dr)

●毎週金曜日 夜7:30
六本木 FIRST STAGE (03-3405-1910)
¥2,000 (ドリンク付)
ジャムセッション進行。

「今月の一枚」

イタリア中部に位置するペルージャといえば、大学が多くイタリア芸術の中心であり、イタリア食文化の中心でもある都市。日本人にとっては中田が衝撃的なデビューを飾ったセリアAのサッカー・クラブチームのある都市としてのほうが有名かも。

そのペルージャにあるレーベル「EGEA」。あまりにも高尚な作品が多く、僕には縁が無いレーベルだった。そのイメージを一新してくれたのが昨年リリースされたEGEA Orchestra。超一流のイタリアン・グルーブに完全にノックアウトされた。この作品も多彩な展開で息をつかせない。特に圧巻は8曲目「Come Nei Film」、9曲目「Yusif」。しなやかでいて官能的なその音にもう絶句!(大河内善宏)



Eddie Roberts Quintet / Trenta (P-VINE Records)

新年1月発売のピッカピカの新譜だけど、なんか古くさいサウンドである。懐かしいというか、既視感があるといえば聞こえは良いのだけど、この感覚、琴線に触れるような高尚なものではなく、恥ずかしい過去にハマるメロ揃いの。音楽の多様主義どころも堂々とやってくると、かえって応援したくなるものである。ひょっとすると、それが狙いだったのかもしれない。そんなエディ・ロバーツは英国人ギタリスト。ジャケ裏にサングラス姿の写真が載っているのだが、これがまたボール・ウェラー一瓜二つ。はたしてこれも計算のうちなのかとか。まあ、これだからジャズは楽しい。

(前泊正人)



Raffaello Pareti / Maremma (EGEA)

旬でホットなジャズ情報! MOONKS EXPERIENCE NEWS Vol.9

結局のところフラワームーブメントで世界は平和になったかと言われるのは「No」だ。それどころか私の世代がそれを知ったときには、ただの「幻想」となっていた。それでもなお音楽で世界が変わると純粋に信じていたあの頃の曲を聴くとき、何かを思い出させるかのように一瞬血流がドクンと波打ち血がよどむ。サイケなジャケとM・ボルナレス、ゲズブル、ツェッペリン、ディランなど60-70年代ポップ・ロックの名曲の数々はジャズと相反するアイテムに思えるが、ロマーノはあくまでジャズを刻み、トロティニョンも彼自身の言葉で60年代をグルーブする。夢の終わりを告げるドアーズの「The End」。ふたたびドクンと血がよどむ。

(白澤茂穂)



Aldo Romano - Remi Vignolo - Baptiste Trotignon / Flower Power (Naive)



Yuichiro Tokuda

潔さが滲み出る、 徳田雄一郎 QuINtet

CLOSE UP INTERVIEW
text by JazzToday 編集部

物怖じしない人一倍の行動力がそのままオリジナルの音像に投影されている。そんな期待の新星を紹介しよう。パークリー帰りの徳田雄一郎、現在25歳。高校の陸上部では「中距離を走っていた」という健脚ぶりが疾走感あふれるスリリングなサウンドの要にある。「誰々のあのフレーズを吹きたい」という想いは一度も抱いたことがありません。常に自由であるためにはどうすれば良いか、そればかりを考えてきた」と語る潔さが、全曲を自身のオリジナルで編んだアルバム『Initial Impulse』を生んだ。

1981年3月、千葉県は千葉市の生まれ。「僕が生まれる1年前に父方の叔父が亡くなっている、

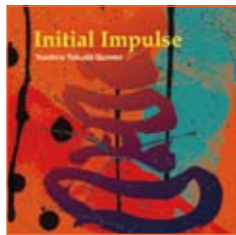
父親は「聴く専門」のジャズ・ファンで、その叔父は「聴くと演るの、両方の人」でサクセスとフルートを吹いていた。実弟の急死を機に徳田の父親は「コレクションを全部閉まってしまった…」そうだが、陸上少年が高校1年の時、「父親がかけていたボール・デスマンドの音色にしびれて」JAZZにたちまち魅せられる。「祖母が叔父の形見のサクセスを見せてくれた途端、これをやりたい!」と感応し、楽器店に走った。叔父のDNAはこうして継承された。

師事したのは当時、パークリーから戻った直後の橋爪亮督。「遭って最初にいきなり『ジャイアント・ステップス』を吹いてください」なんて無理なリクエストをしたら吹いてくれた(笑)。橋爪先生の生き方に憧れたコトが現在に繋がっている」という。サクセス入門と併行してバンドも始め、「LUNA SEAもメロコアもチェックもコピーするバンドでボーカルをやっていた」。00年6月に単身渡米してボストンの土を踏む。「ケニー・ギャレットの出入りを待って『どうしたら貴方のように吹けるようになるのか?』と話しかけ、電話番号を教えたら後日かかってきて、『代わりに俺に日本語を教える条件で(笑)』と1回100\$のレッスンだった

んですが、当時の僕にはお金がなかったから2回目以降は受けられなかった。それが今でも心残りですね」と述懐する。が、持ち前の度胸を發揮してボストンでの路上ライブを始めたら「うちでパーティーで吹いてくれとか、音楽事務所の人から黒人客ばかりの店で演奏するかと誘われたり。ギャラはビザ一枚でも嬉しかった」。帰国後、地元千葉でも路上ライブに挑むが「電源が取れないので反響のある場所を選んで頻繁に行っていたら警察に追い出されて…」拠点を船橋に移した。横顔と活動が朝日新聞で紹介されて、「スイング・ガールズ効果」の特集企画でNHKの『お元氣ですか 日本列島』にも取材されました。路上ライブの代表として(笑)、生中継ライブを。しかし「夕方の番組なので観ているのはじいちゃん、ばあちゃんばかり(笑)」ライブの集客力には結びつかなかった。自己名義のバンドメンバーも変転をくり返したのち、04年4月に「僕が知りうる限り最強の面々で固めた」人員が決まる。リーダーの徳田が一番年下のクインテットだ。初のアルバム制作に入ったのは昨年3月。デモ版への各社の反応は鈍かったが、徳田がユニークなのは“その先の”行動力である。初夏の訪れと同時に自らの音楽会社『GoodNessPlus 合同会社』を設立し、音楽レーベルを旗揚げする。その記念すべき第一弾がここに紹介する『Initial Impulse』なんである。徳田はいう。「僕自身がカッコイイと思ったジャズが売れないわけがないと信じている。要はプレゼンの仕方の問題で、今後は僕がイケると思った若手を発掘して作品を世に問う方向性でいきたい」、この意気の良さに好感を覚える。自ら先陣を切って発表するオリジナル・デビュー作、その音像は変拍子あり、ハーモニーの色合いは多彩、伝統を踏まえながら今日性にあふれ、良質なコンビを聴くような全体の流れを巧く演出している。新鋭バンド、新生レーベルの出帆を祝いたい!

Initial Impulse/ 徳田雄一郎 QuINtet

緻密に交錯する美しい旋律、疾走するリズムライン、そして破壊的なまでに衝動的なピアノ。タイトル『初期衝動』そのままに、新たなインフロウアイズド・ミュージックの地平を切り開く徳田雄一郎クインテットのファースト・アルバムが遂にリリース! リリーダ―徳田雄一郎自身が設立した『GoodNessPlus Records』記念すべき第一弾リリース!!



GoodNessPlus Records
GNPR-1139
¥2,000(税込)

2007/2/14
Release

- 01. Nothing There / 02. home ~絆~
 - 03. sleeping forest / 04. 初期衝動 ~ Initial Impulse ~
 - 05. Brunei / 06. before the dawn / 07. Tidal Wave Warning
 - 08. Awakening of the winglessbird
- パーソネル
徳田雄一郎: A.Sax, スガダイロー: Piano,
鈴木直人: Guitar, 中林真平: Bass, 長谷川学: Drums

徳田雄一郎 QuINtet ライブスケジュール

「CD発売記念ライブ」
3月2日(金) @新宿 Pit-inn 夜の部
www.pit-inn.com 03-3354-2024
4月3日(火) @渋谷 JZBrat
www.jzbrat.com 03-5728-0168
6月17日(日) @新宿 Pit-inn 夜の部
www.pit-inn.com 03-3354-2024
「初赤丸コンサート」
7月7日(土) @千葉市文化センター アートホール
主催: 財団法人千葉市文化振興財団 043-221-2411



JAZZへの扉 Vol.14

やっぱり、人間、踊りだな! 赤木りえ(談)

オンキョーのAV試聴室「マリンシアター」に足を踏み入れるなりプロデューサーの原さんと口を合わせて、「わあ〜、いいですね〜この部屋!」とため息まじりの赤木りえさん。芸大時代に、叔父さんが経営しているピアノ・レストランでピアノの弾き語りのアルバイトを続け、お店が遠かったこともあり、アルバイトをした日には叔父さんの家に泊まらせてもらった。そんな時、従姉妹が聞かせてくれて、これはカッコいい!と惚れ込んだのがオリジナル・サバナ・バンドの『Dr Buzzard's Original Savannahband』。一番のお気に入りの曲は「サンシャワー」だそうです。

子供の頃からバイオリンやピアノを習い、芸大にも入ったのですから、クラシックの演奏家になるはずでした。クラシックはもちろん好きですが、ポサノバも好きで、芸大のビッグ・バンドの練習を耳にしてうずうずしていました。サクセスでベシシーをばりばりやるようなビッグ・バンドなので、なかなかフルート科にはお声がかかりません。大学三年の時、クラシック以外の方向に進みたいと漠然と思い始めていた頃のことです。千葉大のリハーサル・バンドからお誘いをいただき、ピアノを弾き始め、八神純子さんと松任谷由実さんの曲、自分たちのオリジナル曲を演奏していました。そのうちフルートも吹くようになったのですが、アドリブも出来ないで全然間が持ちません。もともとジャズを演奏したかったのではなく、ポップ・ミュージックをやりたいかったのですが、アドリブが出来ないと難しいと言われて勉強を始めました。

ところが、フルートでジャズをやるならドルフィーを聞きなさいとか、コルトレーンの『至上の愛』を聞きなさいとか、チャーリー・パーカーをコピーしなければダメとか、先輩からのアドバイスがいきなりハード。そんな時に、従姉妹からサバナバンドを聞かされました。カッコよくて、ジャズでもありラテンでもあり、アフリカっぽい音もありゴージャズでオシャレ。毎日毎日出始めたばかりのウォークマンで聞いていました。ところが、先輩にオリジナル・サバナ・バンドを聞かされると、何これ? これは違うでしょ...で終わってしまいます。

芸大に通っている間は全然アドリブが吹けなかったのですが、卒業してオーケストラやミュージカルの伴奏のお仕事で知り合ったキューバンボーイズの方から、りえは体を動かすのが好きそうだからラテンに合っているかもしれないと誘われ、いきなりキューバ音楽を聞かされたんです。結局そのバンドでフルートを吹くことになりました。その頃一番流行っていたのがファンシア・オールスターズでしたので、ファンシアのホーン・セクションのパートをフルート一本にアレンジして吹かされたものです。とても楽しいバンドで、ちょっと間違えたり、アドリブが面白くないと、頭をバカ〜んと殴られた

原田真人→宇崎竜童→矢野沙織→早坂沙知→
原田芳雄→坂田明→阿川佐和子→島田歌穂→
森山良子→かまやつひろし→
藤田恵美→岡本真夜→国府弘子→

ゲスト
赤木りえ

【赤木りえ 略歴】

東京芸術大学器楽科(フルート専攻)卒業。クラシックで鍛え抜かれた見事なまでの技術を駆使し、現代音楽、ニューエイジ、ヒーリングだけでなく、ジャズ、ソウルさらにはサルサまでこなしてしまう日本唯一の女性フルート奏者。キューバの「ジャズ・ブラザ」といった世界的に有名な「ジャズフェスティバル」に出演し、「魔法のフルート」とキューバの新聞に評されたその言葉通り、世界に通用する実力とアグレッシブさを兼ね備えたハイパー・レディ・フルート奏者なのである。現在、最新アルバムをフェルトリコで録音中。



り灰皿が飛んで来ましたが、その頃のことが随分今に役立っています。今でもファンシアのホーン・セクションの音はすべて覚えてます。そのバンドでサルサを覚えたのですが、演奏が楽しいという気分ではなく、ただひたすら修業のような日々でした。

レコード・デビューをしてからは、フュージョンをやったり、ニューエイジ・ミュージック、ポサノバ、ブラジリアンなど色々演奏しましたが、何ひとつ自分の核になるものがないまま、アルバムを何枚もつくり続けていました。90年代の始めに、オーケストラ・デル・ソルのピックアップメンバーたちに誘われてアフロ・キューバン・ジャズを久しぶりに演奏した時に、わたしはやっぱりこれが好きだったんだ! ということを実感しました。フェルトリコに半年暮らし、その後あちらでも活動を始め、自分の立ち位置が分ったのは本当に最近のことなんです。

ある時ふと思い出したのですが、子供の頃、『ザ・ヒットパレード』が好きで、その時間になるとひらひらのスカートをはいてテレビの前でザ・ピーナッツと一緒に踊っていました。そんな自分がどこかに残っているのだと思います。自分が好きになるのはすべて踊れる音楽です。身体を揺らせ、踊ることの出来る音楽。やっぱり、人間、踊りだな!

編集協力: ピンポイント

e-onkyo music



”原音”へのこだわり

ジャズ・クラシックの名曲 約3万曲 高音質で勢揃い

HD高品質音楽配信サイト e-onkyo music
http://music.e-onkyo.com/

The live line!

3月の新宿ピットイン 【夜の部】

開場 PM7:30 開演 PM8:00 ¥3,000～(1DRINK 付)



3月1日(木) **ラクダ カルテット**
水上 聡(Key) 林 栄一, 菊地成孔, 佐藤 帆(Sax) 類家心平(Tp)
水谷浩章(B) 外山明(Ds) 中村 敬(Vo)

3月2日(金) **徳田雄一郎**
Quintet 1st CD 『Initial Impulse』 全国発売記念ライブ
徳田雄一郎(As) スガダイロー(P) 鈴木直人(G)
中林薫平(B) 長谷川学(Ds)

■ **Pauliina Lерche 日本盤発売記念ライブ!** ■
前売 ¥5,000 当日 ¥5,500
3月3日(土)

パヴリーナ・レルヒエ(Acco,Vo,Kantele) ハンナマリ・ルーカネン(Vn,Vo)
トゥオマス・ログレン(G,dobro) ユッカ・キロネン(G,Per)
ティモ・ベコネン(B)



パヴリーナ・レルヒエ

3月4日(日)
パヴリーナ・レルヒエ(Acco,Vo,Kantele)
ハンナマリ・ルーカネン(Vn,Vo)
トゥオマス・ログレン(G,dobro)
ユッカ・キロネン(G,Per)
ティモ・ベコネン(B)
※3日,4日共にオープニング・アクト「福」
◎新宿ピットインにて、2/3よりチケット(予約可) 前売り開始。

3月5日(月) **林 栄一 クインテット**
林 栄一(As) 渡辺隆雄(Tp) 久保島直樹(P) 伊藤啓太(B)
小山彰太(Ds)

3月6日(火) **竹内直 カルテット**
竹内直(Ts,Fl,B-cl) 清水絵理子(P) 井上陽介(B) 江藤良人(Ds)

3月7日(水) **羽野昌二 ダブル・トリオ**
羽野昌二(Ds) electric trio: 歳森彰(P) 中村大(E-b)
jazz trio: 歳森彰(P) 永塚博之(B)
ゲスト: 立花秀輝(As) 深水都(P,弾き語り)

3月8日(木) **Aaron Goldberg TRIO** 前売 ¥5,000 当日 ¥5,500
アロン・ゴールドバーグ(P) オマー・アビタル(B)
グレッグ・ハッチンソン(Ds)

◎新宿ピットインにて、2/3よりチケット(予約可) 前売り開始。

3月9日(金) **Hi-Tide Harris & His Friends**
ハイトイド・ハリス(Vo,G) 鶴野美香(P) 江口弘史(B)
タイ・テディーテ(G) わたなべさとし(Ds) さとうみか(Vo)

3月10日(土) **ジョージ大塚 NIGHT**
ジョージ大塚(Ds) 深沢真奈美(P) 高山夏樹(B)

3月11日(日) 原 朋直 カルテット

原 朋直(Tp)
ユキ・アリマサ(P)
佐藤泰彦(B)
森島裕貴(Ds)



原朋直

3月12日(月) **今村祐司 GROUPO**
今村祐司(Per) 松風 紘一(Sax) 加藤崇之(G) 渋谷 毅(P,O)
小泉P克人(B) 本田珠也(Ds)

3月13日(火) **幸島文雄 カルテット・ナイト**
幸島文雄(P) 原 朋直(Tp) 川村 竜(B) 横山和明(Ds)

3月14日(水) **Tipó CABEZA** ¥4,000
佐藤允彦(P) 加藤真一(B) 岡部洋一(Per)

梅津和時 プチ大仕事 2007

15日(木) 16日(金) 17日(土) 18日(日) 19日(月) 20日(火)

前売 ¥3,500 当日 ¥3,800
6日間通し券(新宿ピット
インでのみの取り扱い)
¥19,000(各日1ドリンク付)



梅津和時

3月15日(木)
キングサラマンダーズ・スイング
梅津和時(As) 片山広明(Ts) 谷中 敦(Bs) 上村勝正(B)
斎藤良一(G) 藤乃家舞(B,etc) クハラカズキ(Ds)

3月16日(金) **インプロ・ナイト**
梅津和時(Sax,Cl) 佐藤允彦(P) 巻上公一(Voice)
サム・ベネット(Per)

3月17日(土) **ブルース・コネクション**
梅津和時(Sax) 藤井康一(Vo,Sax) 長見 順(Vo,G) 近藤達郎(Key)
牧 裕(B) 岡地曙裕(Ds) ほか

3月18日(日) **琉球ソウルフ**
梅津和時(Sax,Cl) 新良幸人(三弦、Vo) サトウユウ子(P)
仙波清彦(Per)

3月19日(月) 25年目の DUB
梅津和時(As) 片山広明(Ts) 早川岳晴(B) 菊池 隆(Ds)

3月20日(火) **ニッポンの歌室**
梅津和時(Sax,Cl) 木村充輝(Vo,G) 渋谷 毅(P)
◎新宿ピットイン(店頭販売のみ、13時より),
チケットぴあにて、2/3(土)より
チケット(開場時優先入場整理番号付) 前売り開始。

3月21日(水) **山下洋輔 4G UNIT REUNION**
¥4,000

山下洋輔(P)
竹内直(Ts,Fl,B-cl)
水谷浩章(B)
高橋信之介(Ds)



山下洋輔

SHINJUKU PIT INN

〒160-0022
2-12-4 ACCORD BLDG. B1
Shinjuku shinjuku-ku Tokyo JAPAN

☎ 03-3354-2024
http://www.pit-inn.com

3月22日(木) **西山 睦 トリオ**

西山 睦(P)
大谷訓史(B)
清水勇博(Ds)



西山 睦

3月23日(金) **芳垣安洋 BCS**
芳垣安洋(Per,Ds) 青木タイセイ(Tb, ピアニカ, etc)
木幡光邦(Tp,etc) 高岡大祐(Tuba) 佐藤研二(Cello, etc)

3月24日(土) **荒武裕一朗 TRIO**
荒武裕一朗(P) 金澤英明(B) 今泉総之輔(Ds)
ゲスト: 羽根測道広(Ts)

3月25日(日) **板倉克行 UNIT**
板倉克行(P) 金剛 哲(As) 荒井 哲子(P) 岩見 継吾(B)
池澤龍作(Ds)

3月26日(月) **角田健一 BIG BAND**
開場 19:00 開演 19:30 ¥4,000
角田健一(Tb,作,編曲)

田中 哲也, 浦田雄輝, 高瀬 龍一, 宮本やすし(Tp)
今尾敏道, 鈴木直樹, 川村裕司, 河村英樹, 丹羽康雄(Sax)
中路英明, 橋本佳明, 高橋英樹, 秋永岳彦(Tb)
井上祐一(P) 古西忠哲(B) 小山太郎(Ds)

3月27日(火) **渋谷 毅 エッセンシャル・エリントン** ¥3,500
渋谷 毅(P) 峰厚介(Ts) 松風 紘一(Sax,Fl) 関島岳郎(Tuba)
ゲスト: 林 栄一(As) 外山 明(Ds) 清水 秀子(Vo)

3月28日(水) **Sembello** ¥3,500
沖祐市(P) 田中 邦和(Sax) ゲスト: 山口とも(Per)

3月29日(木) **吉野弘志 nbaba トリオ・セッション**
吉野弘志(B) 田中 信正(P) 藤井 信雄(Ds) ゲスト: 小山 彰太(Ds)

■ **Paal Nilssen-Love: Pit Inn Sessions 2007** ■
前売 ¥4,000 当日 ¥4,500

3月30日(金)
ポール・ニルセン・ラヴ(Ds)
ベーター・プロツツマン(Sax)
八木美知依(20 絃琴、17 絃琴)
ゲストあり(当日発表)



ポール・ニルセン・ラヴ

3月31日(土)
ポール・ニルセン・ラヴ(Ds)
大友良英(G) ナスノミツル(B)
ゲストあり(当日発表)

◎新宿ピットイン(店頭販売のみ、13時より),
チケットぴあにて、2/10(土)より
チケット(開場時優先入場整理番号付) 前売り開始。



吉田美奈子の「音楽の言葉」

聞き書き連載

聞き手: 末次 “JT” 安里 (本誌編集長)

Vol.3

自信

JT: 初回を大竹伸朗さんの話から始めて、前号では「彫刻家に憧れていた」という秘話を語っていただきました。それ思い出しましたが美奈子さんは99年秋、NHKハイビジョン放送の番組『あこがれのアーティストに会いたい』の収録で、大好きなフランク・ステラ氏をNYとトロントに訪ねましたね。なにが感化されたり、印象に残った話がありますか?

吉田: やっぱりねえ、“自信”ですよ。ステラは何年前だったかな、単身で来日したんですが、アメリカ大使公邸の玄関を入ってすぐの左に彼の作品が掛かっているんです。要は大使館が所蔵する美術コレクションの本が出来て、そのパーティーに呼ばれて来たんです。その際再会して、同時に都内で行なわれた講義も聞きに行ったんですが。そこでステラは「今のアートと言われているものはもうボルノグラフィでしかない」と、まるでテロリストのように語るわけです(笑)。「これでは芸術が死んでしまう」って、もの凄くハッキリと云うわけです。さらに「MoMAではこういう展示会が度重なる」と。

JT: ステラ自身がMoMAと縁が深いアーティストなのに…。
吉田: そう、彼はMoMAで2回、大回顧展をやっているわけ。そういう人なのにMoMAの悪い所を堂々と口にして、「これでは芸術は継承できない」と。凄く危機感を持って丁寧に話をして。そういうことってやはり自分の志というかももちろんステラは既に「巨匠」ですし、何時の時代にも先鋭な才能で圧倒してその発言なんです—「自分をきっちり持つ」ということではどういう時代であろうとも、それが大事なんだということ、要するに自信のない時というのは、自分を信じてあげられてないってことだ。そういう意味で自分に愛情をかける、奢るんじゃなくて、冷静に自分を捉え、考えて、自身に愛情を持ってあげるとしても「ものを創る人には必要不可欠なんだ」と。そう、強く感じましたね。
JT: 大竹伸朗、然りですね。

吉田: そう。リスペクトしている人には、常にそういう感覚がある。何というか、揺るぎないものを秘めている感じ。ただね、どんな人にも「イカゲンな所」ってあるでしょうし(笑)。でも、それが重要ではないと思えるほど才能で圧倒すればいいと思う。たとえね、しょっちゅう遅刻して…時間を守るという最低限のルールも関係ない人がいたとして、誰もが嫌でしょう。でも、私は思うんだけど、遅刻しても到着後の短い時間で魅了させてくれたら、その人の性格がどんなに悪くたっていいじゃないかと。素晴らしいかつ

ら好きになるもの。その感動はね、ネガティブな雰囲気を超えちゃうわけですよ(笑)。それはね、勤勉でも時間通りに来ても、そこそこにならないものよりはずっとマシだし、鼻持ちならない態度でも才能が優ってればいいじゃないかと思う。ただ、一般常識じゃないですよ。それに、受け入れる自分がちゃんと弁えていなくちゃね。予測できるその待ち時間を、合理的に使えばいいじゃないですか。あっ、言っときますけど、大竹さんは真摯な方ですよ(笑)。

JT: 自分を貫くという姿勢は芸術の種類を問わない基調だと思いますが、美術の場合は折々で題材を変えてみたり、平面か立体かの選択肢も広い。大竹さんなんかは自在の典型ですが。

吉田: そうですね、常に全部に向いているんですね、うん。
JT: 音楽家として「美術」に嫉妬を感じることはありませんか?

吉田: それはないですよ、憧れはあるけど。強いて音楽だとえるなら、これは「ワシントン・ゴー・ゴーから」とか「ゴスペルな感じ」とか、あるいは「これはクラシカル」とかいう、グルーヴのエッセンスをイメージしてそれぞれの楽曲に配するってことが近いかな。

JT: あ、それはそうですね。
吉田: ただ、それをアレンジ上の問題と言ってしまおうと凄く簡単なんですけど…音の響きがどっち系の響きかかってことが大竹作品で言うスクラップだったり、麗しい廃材利用の作品だったりね。それからコンピュータで音を作るのが、彼がケミカルな現象液を使って発色させている作品に似ていると思ったり…そういうことなんじゃないかと。眠から入る作品は直接的な色合いや素材などを含め、はっきりと別の作品だと判るから実際に独立した全く別の作品と捉われがちですけども、それを作業した時間が違うだけで、どれも同じ人が携っているわけなんです。だから音楽もアレンジ上のこととか、あとは使う楽器、使うツールの違いじゃないかと思うんですけどね。

JT: そういえば美奈子さんの場合は、デビュー時に「幻の天才少女」と呼ばれ、アルファ時代は「すて腕ミナコ」と言われて(笑)。

吉田: (爆笑)。ああいうものは会社が人に伝えるためのイメージ・コピーでしかないんで、なんと云われようとい

【吉田美奈子】シンガー/プロデューサー/作詩・作曲家
1969年、当時交流を持った音楽家たちから影響を受け、楽曲制作を始める。間もなくシンガー・ソング・ライターとして、ライブ中心の音楽活動を開始する。1973年、アルバム『扉の冬』で本格的なデビューの後、CM音楽等の制作、他のアーティストのプロデューサー、コーラス等のスタジオワークも。2007年1月現在、オリジナル・アルバム19作品(ライブ、ベスト、シングル、企画盤は除く)、コラボレーション・アルバム2作品、ライブ映像収録盤を4作品リリースしている。ジャンルを取った自由自在な音楽活動は、クオリティーを保ちながら個性を発揮するミュージシャンズ・ミュージシャンとして、多方面から共演を熱望され、常に高い評価を得ている。



JT: そういうキャッチコピーはべつとして御自身ではどうですか、「吉田美奈子の音楽」にも時期ごとの色合いや周期、季節にも似た変化はあるとお考えですか?

吉田: ありますよ。でも、根本に流れているものは同じです。「装飾」が変わる感じかな。服で言えば、新しい感触や光沢のある布が生まれてね、それが美しくより優れていればその素材で作られた服が増える。そうすると手にする機会も多くなる。そういったことなんじゃないかと思うんです。

within Vision 3 / 吉田美奈子

2004年、東京の品川教会で行われた倉田信雄(ピアノ)とのDUO公演が、DVDとなって発売されています。厳選した曲目が、聴く者すべての心を掴み、自然に流れ出る涙が止まらなかったと、いまだ語り継がれている特別な一夜が、余すところなく収録されています。



01. VOICES
02. 声を聞かせて
03. PRECIOUS
04. SIGN OF DISTANCE
05. 皿
06. CORONA
07. 傍にいる
08. 雲の魚
09. FORGIVING
10. STARBOW
11. もみの木
12. LIBERTY
13. 星の海
14. 愛があたたまる
15. おやすみ

IOBD-21017 ¥5,040(税込)
2004/11/03 RELEASE DVD

YOSHIDA MINAKO & THE BAND 2007 2Days live ~ Ha!! ~

2007年3月16日(金)/17日(土)
STB139 港区六本木6-7-11

■開場 18:00 開演 19:30
■料金 7,350円(税込) 但し飲物と食事は別料金
■出演 吉田美奈子、岡沢章、土方隆行、倉田信雄、河合代介、成田昭彦

チケットぴあ 0570-02-9999 Pコード 248-931
ローンチケット 050-00-0403 Lコード 37628
スイートページ139 03-5474-0139 (受付月~土 11:00~20:00)
インターネット予約は 24時間受付
■問合せ先: STB139 03-5474-0139 (受付月~土 11:00~20:00)

NEW DISC INDEX



マブイのうた

安富祖貴子

魂を感じさせ、深く、濃く、情感に満ちた歌声。沖繩・金武で生まれ育った安富祖貴子だからこその歌える、銀色のジャズ!

M&I Jazz
MYCJ-30409
¥3,000(税込)

2007/2/21
Release

- 01. マーシー・マーシー・マーシー
- 02. アイリング・グッド / 03. 残された人生
- 04. マック・ザ・ナイフ / 05. ペサメ・ムーチョ
- 06. 消えゆく太陽 / 07. ラヴァーズ・コンチェルト
- 08. マイク・ウェイク / 09. ソング・フォー・マイ・ファザー
- 10. ドント・エクスペイン / 11. すべてをあなたに
- 12. いとしい人の髪は黒

安富祖貴子 (vo) / 井上階介 (b, arrange)
大隅寿男 (ds) / 小山太郎 (ds) / 安井さち子 (p)
岡安芳明 (g) / 川崎哲郎 (ts) / 太田剛 (as)
金子雄太 (org)



Vector 音律

METHOD

圧倒・驚倒・七転八倒、帰って来た METHOD
・・・もう発つ。

VEGA MusicEntertainment
VGDBRZ0026
¥3,150(税込)

2007/3/6
Release

Produced by: Masatoshi Mizuno
Co-produced by Kanichiro Kubo

水野正敏・Electric Bass
村上 晋太 奏 - by the courtesy of Victor Entertainment, Inc. Drums
仙波清彦・Percussion
吉川初穂・Piano
梅津和時・Sax
久保幹一・Noise Guitar, Manipulator
木村正和・Engineer

+
高橋香織・Violin
河田藤彦・Didgeridoo
久富 "RICH" 良一・Rap
渡邊美佳・Accordion
新井直・Scratch
瀬戸聖次・Additional sound Design
Hide・Vocal
Madam M. GETA
大山 "Einstein" 幸一・Dub Mix



Music Is Real.

What's Up?

トラディショナルなジャズの要素と若手ならではの感性を見事に融合させ、唯一無二なサウンドとスタイルを十分に確立したアルバム、「ミュージック・イズ・リアル」は、多くの音楽ファンにお勧めできる一枚じゃないかな。あなたのCDコレクションに欠けてはならないアルバムだ。本当に大好き!

CMD
CMD-33002
¥2,625(税込)

2007/1/24
Release

- 01. Introduction
- 02. Which One Is True
- 03. I can't Live Without it
- 04. Telemundo
- 05. Edelweiss
- 06. Into The Dream
- 07. Minor's Holiday
- 08. Five Minutes To Tomorrow

By バウロ・スコッティ (From Deja vu)



一期一会

後藤浩二

後藤浩二が描く躍動と叙情世界・渾身の初ソロライブ完全録音版

jazz inn LOVELY
KBYK-12604
¥2,500(税込)

2007/3/29
Release

- 01. A Story
- 02. Siciliano
- 03. Someone to watch over me
- 04. Utakata
- 05. Princess Anne
- 06. ピアノ協奏曲 長調二楽章〜 Bridges
- 07. Caravan ~ Cantabile

後藤浩二 (piano)



A House ins not a Home

榊原洋子

悠々と歌う 大きく呼吸した魂の歌声

jazz inn LOVELY
KBYK-5603
¥2,700(税込)

2006/12/20
Release

- 01. New York State of mind
- 02. (You make me feel like) A Natural woman
- 03. Love me Again / 04. On the Street Where You Live
- 05. 恋をしようよ / 06. Feel like Making Love
- 07. Crazy He calls me / 08. That's All
- 09. A House in not a Home / 10. My Swweet Love
- 11. The Nearness of you / 12. Love me Again

榊原洋子 (vocal)
後藤浩二 (piano&Rhodes)
島田剛 (bass)
黒田和良 (drums)
峰厚介 (tenor sax)
和田直 (guitar)



A Day Out

浜崎航

にじみ出る色気に、ヤラレルヨ by KEIKO LEE

jazz inn LOVELY
KBYK-5606
¥2,500(税込)

2007/3/1
Release

- 01. Daruma / 02. A Day Out
- 03. Squared Circle / 04. Tamayura
- 05. Mr.Chain Smoker / 06. Paradise
- 07. Basically / 08. Dream Life
- 09. New Day

浜崎航 (tenor sax, soprano sax, flute)
フィリップ・ストレンジ (piano)
島田剛 (bass)
黒田和良 (drums)



フェイスワン

エミコ×スガダイロー

「甘くスウィングーなヴォーカルに挑みかかる驚愕のピアニスト! 実力派ジャズヴォーカリスト EMIKO 待望のデビュー作は、今注目のピアニスト、スガダイローによる大胆不敵空前絶後のピアノとの新感覚デュオ。ガーシュウィン、エリントンナンバーを含む、大人の夜のジャズ」

エクレクティックレコード
JZ070119-24
¥2,500(税込)

2007/1/24
Release

- 01. JUST SQUEEZE ME / 02. LET'S DO IT
- 03. I'VE GOT A CRUSH ON YOU
- 04. NICE WORK IF YOU CAN GET IT
- 05. I AIN'T GOT NOTHIN' BUT THE BLUES
- 06. BLAME IT ON MY YOUTH / 07. LITTLE WILLIE LEAPS
- 08. MOODY'S MOOD FOR LOVE
- 09. BYE BYE BLACKBIRD / 10. THE MAN I LOVE

EMIKO(vo)
DAIRO SUGA(p)



Dawn ~夜明け

iLL+ 勝井祐二

ハード・コア・ヒーリング・サウンド!!
2006年のフジロック・フェスティバル「木道亭」でのステージをきっかけに始まったプロジェクト「iLL+勝井祐二」は有機的に繋がり、今作「Dawn ~夜明け」に結実した。様々な環境と、それぞれの音に共鳴し、一期一会のストーリーを紡ぎ出す環境因子作品。これは、環境と音楽の再構築。もしくは音楽と環境のイリュージョン (錯覚体験) とも言うべき試みだ

まほろしの世界
MABO-022
¥2,625(税込)

2007/2/21
Release

- 01. After Dawn / 02. Before Dawn

iLL
勝井祐二



カカリ乱幻

一噌幸弘トリオ

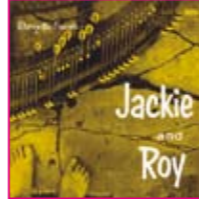
日本が誇る伝統芸能「能楽」の革命児、一噌幸弘が作り上げた、最新型「ジャパニーズ・トラディショナル」!

tohyohyo music
tohyohyo-002
¥3,150(税込)

2007/2/18
Release

- 01. わにとかけ / 02. I SEE I SEE OK OK
- 03. トルコ節 / 04. 上羽
- 05. ひよこの小学校 / 06. 13.5 拍子の舞
- 07. カカリ乱幻 / 08. おかゆ
- ボーナストラック (09): わにとかけ take 2

一噌幸弘トリオ
一噌幸弘 (能管、篠笛、田楽笛、リコーダー、ゲムスホルン)
鬼怒無月 (アコースティック・ギター、エレクトリック・ギター)
吉見征樹 (タブラ、マタカ)



ジャッキー・アンド・ロイ

ジャッキー・アンド・ロイ

ジャズ界きってのオシドリ・コンビとして有名なジャッキー&ロイが残した数多くの作品の中でも真っ先に挙げられる代表作。パーニー・ケッセル、レッド・ミッチェル、シェリー・マンなど大物ウエスト・コースターズをバックに夫婦ならではのピッタリと息の合った絶妙のハーモニー、そして「足のジャッキー・アンド・ロイ」としても知られる名盤

Storyville
MZCB-1117
¥2,200(税込)

2007/3/7
Release

- 01. セイズ・マイ・ハート / 02. レッツ・テイク・ア・ウォーグ・アラウンド・ザ・ブロック
- 03. スプリング・キャン・リアリー・ハンク・ユー・アップ・モスト / 04. マイン / 05. ヒルズ・ヒット / 06. ラヴァー / 07. タイニー・トルート・ミー / 08. ユー・スメル・ソー・グッド / 09. レイジー・アフタヌーン / 10. ダワード / 11. リッスン・リトル・ガール / 12. アイ・ウィッシュ・アイ・ワー・イン・ラヴ・アゲイン

ジャッキー・ケイン (vo) / ロイ・クラーク (vo) / パーニー・ケッセル (g)
レッド・ミッチェル (b) / シェリー・マン (ds) / フランキー・キャップ (ds)



ナウ・イン・ヴォーグ

テディ・キング

ジャズの伝導師、寺島靖国氏をはじめ多くの熱狂的ファンを持つ白人ヴォーカリスト、テディ・キングの美声! 通好みなからその切々しい清楚な歌声は、一度聴いたら耳から離れない。RCA などにもアルバムで残しているが、テディ・キングといえはやはり3枚のストーリービル盤、その中でも本作がベスト。

Storyville
MZCB-1119
¥2,200(税込)

2007/2/23
Release

- 01. ホワイ・ドゥ・ユー・サボーズ / 02. 虹の彼方に / 03. ジズ・イズ・オール・ウエイズ / 04. フルーズ・フォー・イン・ラヴ / 05. アイ・ディント・ノウ・アバウト・ユー / 06. アイ・イン・ザ・マーケット / 07. フォー・ユー / 07. ユー・ヒット・ザ・スポット / 08. サムシング・トゥー・リヴ・フォー / 09. ユー・キャン・ディベンド・オン・ミー / 10. オールド・フォックス / 11. ライク・ア・シップ・ウィズ・アウト・ア・セイル / 12. ユー・ターン・ド・ザ・テラブル・ズ・オン・ミー

テディ・キング (vo) / ボブ・ブルックマイヤー (tb)
ジョン・クイル (as) / スタン・ルービー (ds) / ニック・トラヴィス (tp)
ビリー・テイラー (p) / ミルト・ヒルトン (b) / オシー・ジョンソン (ds)
ソル・シュリンジャー (bs)



イントロデューシング

ミリー・ヴァーノン

幻のレーベル、ストーリービルの中でも最もレアなアルバムとして知られる謎の美人シンガー、ミリー・ヴァーノンの幻のアルバム。今は亡き人気脚本家・エッセイスト、向田邦子が発したジャズ・アルバムとしても話題となり多くの人が探し求めていた。8年前に一度CD化されたが現在中古盤市場では数万円の価格で取引されている。

Storyville
MZCB-1116
¥2,200(税込)

2007/3/7
Release

- 01. ウィーブ・フォー・ザ・ボーイ / 02. モーメンツ・ライク・ジズ / 03. スプリング・イズ・ヒア / 04. セント・ジェームズ病院 / 05. マイ・シップ / 06. 今年のキッス / 07. ムーン・レイ / 08. エヴリシング・バット・ユー / 09. エヴリ・タイム / 10. プルー・レイン / 11. アイ・ドント・ノウ・ホワット・カインド・オブ・ブルース・アイヴ・ガット / 12. アイ・グズ・アイル・ハヴ・トゥ・ハンク・マイ・ディアーズ・アウト・トゥー・ドレイ

ミリー・ヴァーノン (vo) / ルビー (b) / ジミー (tp)
ジミー・レイニー (g) / デイヴ・マッケンナ (p)
ワイアット・ルーサー (b) / ジョー・ジョーンズ (ds)



アット・ストーリービル

ビリー・ホリデイ

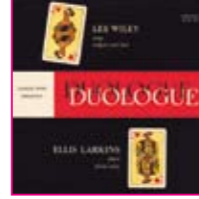
レディ・デイトとビリー・ホリデイの膨大なコレクションの中でも最高峰ともいえる伝説の名唱集。彼女の音楽人生の絶頂期を迎えた50年代前半、ボストンのストーリービル・クラブに出演した時の貴重な放送録音。3曲でサボートを務めたスタン・ゲッツの好プレーも聴きもの。ウォークマン・ファンのみならず全てのジャズ・ファン必聴盤!

Storyville
MZCB-1118
¥2,200(税込)

2007/2/23
Release

- 01. 水辺にたずみ / 02. トゥー・マウエラス・フォー・ワーズ / 03. アイ・ラブ・ユー・ボーイ / 04. ゼム・ゼア・アイズ・フォー・ユー / 07. ユー・ゴット・トゥー・マイ・ヘッド / 08. ヒーズ・フアン・ザット・ウェ / 09. ビリーズ・ブルース / 10. ミス・ブラウントゥ・ユー / 11. 恋人よ我に帰れ / 12. エイント・ノーパティ・ビジネス・イフ・アイ・ドゥ / 13. ユー・アー・ドレイビング・ミー・ウレジー

ビリー・ホリデイ (vo) / スタン・ゲッツ (ts)
バスター・ハーディング (p) / ジミー・ウッドレイ (b) ... 他



デュオローグ

リー・ワイリー&エリス・ラーキンス

かつて某評論家から小説の切れ上がった新橋の芸者と呼ばれた薄幸の美人シンガー、リー・ワイリーと玄人好みのピアニスト、エリス・ラーキンスのアルバムをカブリングした異色作。リーの清楚なお色気がたよる上品な歌声とリラックスなソフティスティケイされたエリス・ラーキンスのピアノがベストマッチ。

Storyville
MZCB-1120
¥2,200(税込)

2007/2/23
Release

- 01. マイ・ハート・ストローク・スティル / 02. ルッキング・アット・ユー / 03. ユー・トゥック・アドヴァンテージ・オブ・ミー / 04. パパ・マイセルフ / 05. マイ・ロマンス / 06. キヴ・イット・バク・トゥー・ジ・インディアンズ / 07. マウンテン・グリー・リリー / 08. イット・ネヴァー・エンタード・マイン・ヴァレンタイン / 09. パフォー・アンド・レイン / 10. マイ・フュー・ヴァレンタイン / 11. セン・アイル・ビター・タイアード・オブ・ミー / 12. グラッド・トゥー・ビー・アノハッピー

リー・ワイリー (vo) / ルビー・ブラフ (tp) / ジミー・ジョーンズ (p)
ビル・ペンバートン (b) / ジョー・ジョーンズ (ds) / エリス・ラーキンス (p)



ガーシュウィン・ソングブック

パティ・オースティン

パティ・オースティン、大いにガーシュウィンを歌う! 最高峰 R&B シンガーから最高峰ジャズ・シンガーへ軽身進化を遂げた、パティ・オースティンの5年ぶりとなるニュー・アルバム登場。ビッグバンドを従え大迫力で歌うパティ・オースティン。07年、没後70年を迎えるスタンダードの生みの親、ジョージ・ガーシュウィンに捧げた、パティの真珠のヴォーカルが聴ける最高傑作!

Rendezvous Entertainment
VACJ-1013
¥2,625(税込)

2007/2/21
Release

- 01. Overture/Gershwin Medley-I Got Rhythm / Fascinating Rhythm / Slap That Bass / Clap Your Hands / Strike Up The Band / 02. I'll Build A Stayin' To Paradise / 03. Who Cares / 04. Funny Face / 05. Love Walked In / Love Is Sweeping The Country / 06. Swanee / 07. Porgy & Bess Medley - A Woman In A Sometimes Thing / Summertime / There's A Boat Dat's Leavin' Soon For New York / It Ain't Necessarily So / I Got Plenty O' Nuttin' / 08. Lady Be Good

パティ・オースティン (vo) / WDR Big Band Köln



イースタン・スカイ

ジャック・リー

韓国スーパー・ギタリスト、ジャック・リーのニュー・アルバム! これぞアジアが放つジャズ・シンガー・アルバム決定盤! 壮大なスケールで迫る楽曲、アレンジ、演奏、完成度、どれを取っても絶品。まさに「Asianergy = アジアのエネルギ」で、アジア界の極上フュージョンが体感できる。ジャック・リーならではのオリジナリティ溢れる超大作! 今回のジャック・リーは凄い。

VideoArts Music
VACM-1301
¥2,625(税込)

2007/2/21
Release

- 01. Night with You / 02. Eastern Sky / 03. Home / 04. I Was Written A Thousand Years Ago / 05. Lembra De Mim (Remember Me) / 06. Mangga Dua / 07. When I Get Close To You / 08. Elephant Dance / 09. Minha Alma (My Soul) / 10. Somewhere In Time

ジャック・リー (g) / ルイス・ブラガサム (ds, perc)
リリト・スミトモ (ts, EW, key) / チャールズ・ブレンジグ (p, key)
デヴィッド・ダイブソン (b) 他
スベシヤル・グースト:
ボブ・ジェームズ (key) on 1, 2, & 6
ネイザン・イースト (b, voices) on 1, 2 & 4
渡辺香津美 (acg) on 10

Jazz Today



Unchained Rhythms

Joaquin "Joe" Clausell

[CD]
01. Creation / 02. Orgasm / 03. Fertilization (The Beginning) / 04. Birth / 05. Life / 06. Darkness / 07. Years Later / 08. The Cosmic Forest / 09. Angel in the woods / 10. Bahian Trance - Birá Reiss * / 11. Unchained Rhythms / 12. Maringa / 13. The Ya Yo People / 14. Water / 15. Tears For Chiyo / 16. Celestial Mammals / 17. Eno / 18. A Child's Marimba Dance / 19. Space Tango / 20. Valley Of The Sticks / 21. Another Doorway / 22. Thank You Universe - Ayuri / 23. Listening To Silence / 24. Egebe Awon Okunrin / 25. What Fate Has Installed For Us All / 26. A Different Language / 27. Mafungo

[CD2]
01. Mystical Wonderland / 02. Middle Eastern Blues / 03. Seeds To The Vine / 04. Autumn Prayer / 05. What The World Needs Now / 06. Harmony - Ayuri / 07. Ju/Ru Music / 08. Land Of The Peaceful / 09. Betrayed / 10. My Beloved Where Are You? / 11. Wail Of The Heart / 12. Mother Nature / 13. Salvadorian Funk

Sacred Rhythm Music Forest6.SRM

2007/3/6 Release



ボサ・ノヴァ・イズ・ノット・ア・クライム

ザ・ジュジュ・オーケストラ

ドイツから現れたソウル/ラテン/ジャズを最高にクールに料理するDJ & プロデューサーのトリオ。そのサウンドのキーワードは『HIP』!

01. This Is Not A Tango
02. Nao Posso Demorar - feat. Katia B
03. What Is Hip? - feat. Carolyn Leonhart & Terry Callier
04. Take Four
05. Do It Again - feat. Carolyn Leonhart & Robert Smith
06. Kind of Latin Rhythm / 07. El Bravo / 08. Funky Nassau
09. What is Hip? - Mo' Horizons Latinstyle *
10. What is Hip? - Mo' Horizons Hipstyle *
11. Kind of Latin Rhythm - Smooove Remix *
12. Kind of Latin Rhythm - Dubben Mix *

*日本盤限定ボーナストラック

inpartment / Rip Curl Recordings RCIP-0104

¥2,500(税込)

2007/2/12 Release



ディヴァイディング・オピニオンズ

ジャルディーニ・ディ・ミロ

コールドブレイの叙情性、ソニクユースのダイナミズム、マイブラのセンチメンタリズム、を兼ね備えた世界でも類を見ないロマン主義ロックの大傑作!

01. dividing opinions
02. cold perfection
03. 3-embers
04. july's stripes
05. spectral woman
06. broken by
07. clairvoyance
08. self help
09. petit treason

Thomason sounds/inpartment TSIP-2018

¥2,400(税込)

2007/2/4 Release



2 x 2

Indigo jam unit

結成1年。2006年2月にリリースした1stアルバム "demonstration" が様々なチャートに躍出した関西在住4人組 "indigo jam unit"。日本的な音階を取り入れた美メロ・トラック、展開が予想不可能な迫力あるサウンドの楽曲、ゴリゴリのウッドベースがうなる激トラック、激走するスピリチュアルなJAZZ、その他 HIP HOP、FUNK、LATIN ティストを取り入れたプロライクなトラックなどを9曲収録。修正なしの全曲一発録音、繊細さと豪快さをさらに増した極大グループを聴いて下さい!

01. sakura / 02. car chase / 03. ibuki / 04. Charlie / 05. alert 06. gekko / 07. spin a top / 08. 2 x 2 / 09. Sam

樽楽嘉哉 (pf) / 'BJ' 笹井克彦 (wb) 和佐野功 (dr,pe) / 清水勇博 (dr)

basis records bss016

¥2,310(税込)

2006/12/13 Release



STOP THE EARTH, I WANNA TO GET OFF

ZEB

メルティングポット、NYから発信される今一番ホットなファンク+ダブ+ハウスのエスニック・パレオリックダブハウスの傑作が登場!!!

01. Something On Your Mind (Dino Valenti)
02. When A Man Loves A Woman (Calvin Lewis / Andrew Wright)
03. In My Own Dream (Paul Butterfield)
04. Katie Cruel (Traditional)
05. How Sweet It Is (Dozier/Holland/Holland)
06. In A Station (Richard Manuel)
07. Take Me (George Jones / L. Payne)
08. Same Old Man (Traditional)
09. One Night Of Love (Joe Tate)
10. Are You Leaving For The Country (Richard Tucker)

Octave-Lab/Wonderwheel Recordings OTLCD-1088/WONDERCD004

¥2,678(税込) ※国内版

2007/2/17 Release

PRODUCED BY HARVEY BROOKS
ORIGINALLY RELEASED BY PARAMOUNT/ JUST SUNSHINE (1971)



SIMPLE

Håkan Lidbo + Alex van Heerden

最も多作なエレクトロニック・プロデューサー Håkan Lidbo と南アフリカのジャズ・ミュージシャン、Alex Van Heerden が獲得のコラボレーション!

[CD-1] 01. Ain't No Other Man (Opina Sullivan Club mix) / Christina Aguilera / 02. When You Were Young (Jacques Lu Corre's Thin White Duke Dub) / The Killers / 03. Love Don't Let Me Go (Walking Away) (Loachim Garraud & David Guetta's *** Me I'm Famous Mix) / David Guetta Vs. The Egg / 04. Bossy (The Scumfrog Vocal mix) / Kelis / 05. SOS (Chris Cox Club mix) / Rihanna / 06. Rock This Party (Everybody Dance Now) (Original Club mix) / Bob Sinclar / 07. Borderline (Vocal Club mix) / Michael Gray feat. Shelly Poole / 08. Single (Marjyn Ten Velden & Mark Knight "Future Funk" remix) / Natasha Bedingfield / 09. Here (In Your Arms) (Young Americans remix) / Hello Goodbye / 10. The Only Difference Between Martyrdom & Suicide Is Press Coverage (Tommie Sunshine Brooklyn Fire Remix) / Panic! At The Disco / 11. Break Up (Cascadia remix) / Kim Sazer / 12. Go Crazy (Giuseppe D's Euro Madness mix) / DJ.T. feat. Edmee
[CD-2] 01. One Love, World Love (Club Extended) / Yardi Don Vs. Frank Ti-Aya / 02. Shine On (Hello & Mallo's Gate Laune remix) / Sanlovez / 03. What A Feeling / Peter Luts & Dominico / 04. By My Side (Pipa remix) / Flanders / 05. Take It (Haji & Emanuel remix) / Tom Novy & Lima / 06. Boogie 2nite (Seamus Haji Big Love Club mix) / Booty Law / 07. Proper Education (Club mix) / Eric Prydz Vs. Floyd / 08. Yeah Yeah (D. Ramirez Vocal Club mix) / Bodyrox feat. Luciano / 09. Put Your Hands Up For Detroit (Club mix) / Fedde Le Grand / 10. This Is Mine (Club mix) / Sander Kleinenberg / 11. Don't Go (Club mix) / Starting Rock feat. Diva Awan / 12. Dance4Life (Fonzelloni remix) / Teesto

PERMANENT PERM-001

¥2,400(税込)

2007/3/10 Release



シヤムムタ

朝崎郁恵

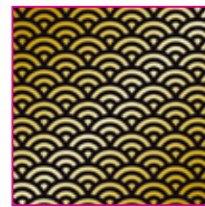
奄美の方言で「シマの言葉」を意味する「シヤムムタ」。シマ唄の伝統を守り続け、新たな表現を目指してコラボレーションを重ねてきた唄者・朝崎郁恵が放つ、入魂のミニアルバム。ピアノにウォン・ウィンツァンが全面参加。

01. いきやびき
02. 後金
03. ほごらしゃ
04. アミヤレ
05. しょうれん
06. よいずら

mother earth MTCA-1025

¥2,000(税込)

2006/12/6 Release



はまさき

朝崎郁恵 x ヨシダダイキチ

『朝崎郁恵とアラバヴィジャンナで快進撃を続けるシタルの鬼才・ヨシダダイキチ氏との新ユニット』が誕生。地域、民族、宗教を越えて、奄美〜インドネシア〜インドを繋ぐ、黒潮の潮流に乗った地球の音楽が完成。

01. オトホギ / 02. はまさき / 03. Sound from Hamasaki / 04. 千鳥舟
05. Sound from Chijiyahama / 06. 妻れ立立 / 07. 喜歌いなくん
08. Sound from Kateretuninankushu / 09. 純純長尺 / 10. センゴロ
11. Sound from Sengurumi / 12. Sound to Chijiyahama
13. 千鳥舟 / 14. オトムス

HIGH CONTRAST RECORDINGS HCCD-9518

¥2,800(税込)

2007/1/24 Release

ウツテマ/ヤチ: Gamelan / U-zhaan(ASA-CHANG& 巡礼.): Tabla Arunangshu Chaudhury: Tabla / 外山明: Drums
Maya: Harmonium, Tabla, Koto / Indra Gurung: Bansuri
トチ: SteelPan / Sitaartah: Sitaar / 新原恭子: Vocal
山川冬樹 (AlayaVijana) : Khomeei, Igit / 潮川U-K-O(AlayaVijana): Tabla
カネコテツヤ (AlayaVijana): Pakhawaj



唄ウムイ

大城美佐子

およそ10年ぶりの新譜となる今作は、矢野龍子を始め、ブルーハーツ、電気グルーヴ等、幅広いジャンルで活躍しているリミキサー、ミキサーの上原キコウ氏のプロデュースにより、「若い世代が聞ける沖縄民謡のスタンダード」をテーマに、構想から3年の月日を経て完成しました。

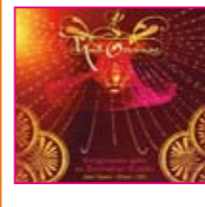
01. あやぐり / 02. ていんざくぬ花 / 03. デンスナー節 / 04. 全ン妻節 (ずんとうじふし) / 05. 黄花 (ぬちばな) ~商標節 (なんたきふし) / 06. 移民小唄 / 07. ナーグー ~山原汀間当 (やんばるていーまとう) / 08. 国頭大福 (くんじやんでーふく) / 09. ケーヒットウリ節 ~六角堂 / 10. 敷島煙草 (しましまたばこ) / 11. 白雲節 / 12. 鹿藩め武士 (はいばんめさむらい) / 13. 親の心 (うやめくくる) / 14. 別れの煙 (わかれのちり)

唄・三線: 大城美佐子 / 唄・三線・琉琴: 知名定男
島太鼓: 八木政男 / 唄・三線: 名護良一
お囃子・三板: 堀内加奈子

タフピーツ UBCA-1008

¥2,400(税込)

2007/1/24 Release



オランの夜〜ライブ、フェスティバル、レ・ゼスカル2005〜

V.A.

本アルバムは、1992年からフランスのブルターニュ地方サン・ナゼールで開催されているフェスティバル・レ・ゼスカルという音楽祭において、2005年度に2日間の日程で企画された「オランの夜」というマグレブのミュージシャンを集めて行われたコンサートの模様を収めたライブ盤です。

01. シェバ・ジャミラとリベルテ: わたしを愛する娘 / 02. シェバ: 髪を染める女 / 03. モスタガネムのアイサウア教団: (アイサウアのトランス) わたしがよき導き手なる預言者ムハマドへの祈り / 04. トランス・グナウイ: 時代は変わった / 05. ガイタ・トリオ: (ベドゥイン音楽) / 06. シェバ・ジャミラとリベルテ: メデハット・カクテル / 07. シェバ: わたしはもうどうしてよかったのだろう、この美女に心を奪われた / 08. ガイタ・トリオ: (ベドゥイン音楽) / 09. トランス・グナウイ: 柄のない鱈 / 10. モスタガネムのアイサウア教団: (スーフィー音楽) 苦しむ心を持つ者 / 耳ある者よ、アラはわれらが主なり

ビーンズ・レコード BN5CD-524

¥2,940(税込)

2007/2/4 Release



チビティ・ローリンツ

サローキ・アーギ

ハンガリーの歌姫! 傑作『ラメント』に続く待望の新作ソロ・アルバム!!

01. 夜明けの雲が飛んでいる / 02. ミチ / 03. 秋
04. ベラベラ / 05. お日様って何だろう
06. ガチョウは友だち / 07. 労働者
08. 目に髪がもこもこ / 09. 母の娘
10. 市場に行ったの / 11. 朝顔: 金魚は何で言った?
12. 金魚は何で言った? / 13. 狭い道と広い道
14. 誰かが誰かを好きになる / 15. 梨の木、梨の木
16. 田舎っぺが都会の話をする
17. クチャテシ・バーリン / 18. 蝶
19. ぴっちゃん、ぽっちゃん / 20. ななつ頭の妖精
21. なんねよ、ペイビー

ビーンズ・レコード BN5CD-8833

¥2,835(税込)

2007/2/18 Release



ザ・ベスト・オブ・ハンガリアン・ミュージック2

V.A.

ハンガリーの多彩な音楽文化を楽しめる決定盤!

01. Dresch Quartet: Szelben / In The Wind (reszlet / extract) / 02. Egy Kiss Erzsi Zene: No ked / 03. Kerekes Band: Pimasz / Cheeky / 04. Nomada: Man nasias Khanchi / I Have Got Nothing Left / 05. Mitsoura: Devat ku (reszlet / extract) / 06. Besh o droM: Dedo / 07. Tango Esperimto: Tomyo obligo / 08. Earth - Wheel - Sky Band: Rumba Janika / 09. Nigun feat. Daniel Zamir: Wallenstein's Niggun / 10. Szaloki Ag: Szallnak az alkonyi felho' k / The Clouds Of Dusk Are Flying / 11. Marozsan Erika: Hideg hidak / Frigid Bridges / 12. V/A: Ro: pu: lj. pava... / Fly Up, Peacock... / 13. Balogh Sandor-Palya Bea-Bolya Matyas: "Kilenc alma" / "Nine Apples" / 14. Citruserdő / Citrus Forest / Citrus Forest / 15. V/A: Tallibille csardas (reszlet / extract) / 16. Berecz Andras: Csendes pasztor nagy madara / The Quiet Shepherd's Big Bird / 17. Ifju Szivek: Skriza

ビーンズ・レコード BN5CD-8830

¥2,625(税込)

2007/2/11 Release



ズィーナ

ズィーナ

マグレブ音楽とアフロ・ビート、そしてバルカン音楽が砂漠と地中海を介して南イタリアで融合した!

01. TAILA
02. FEILA
03. VENEZ VOIRE
04. SUDANI
05. DUDA
06. HAMILUDA
07. MIMUNA
08. PER ESMA
09. LECCE ALGERI
10. RIMMITI
11. ZINA LA MAMA
12. DAWNI

ビーンズ・レコード BN5CD-8832

¥2,940(税込)

2007/2/18 Release



デスカルガ1&2+a 1964年ザ・コンプリート・セッションズ

チューチョ・バルデース・イ・ス・コンボ

キューバン・ジャズの巨匠チューチョ・バルデースが自身のコンボで1964年に発表したアルバム【デスカルガ】のVOL.1とVOL.2の2枚、さらに同年発売のコンビ盤【ピアノフォルテVOL.2】に収録された3曲をCD1枚に詰め込んだ貴重かつお得な復刻アルバムです。チューチョは、1974年に自身のバンド、イラケレを結成、世界中にキューバン・ジャズ旋風を巻き起こしましたが、それより以前1960年代後半より、革命後キューバの新旧トップ・アーティストを集めて結成され、イラケレの前身となったスーパー・ビッグバンド、オルケスタ・ティピカ・デ・ムシカ・モデルナに参加。その活動と同時に、さらなる可能性を突き詰めるべく、自身の小編成バンドで、精力的かつ独創的に活動をしていました。この1964年の一連の録音は、後に大輪を吹かせるキューバ音楽とジャズの融合をめざし活動を始めた黎明期の貴重な記録であり、彼の実質デビュー作でもあります。また彼同様多岐なキューバン・ピアニストである父ベボ・バルデース譲りの明瞭でアタックの強いピアノ演奏を中心に、当時のウエスト・コースト・ジャズの影響とキューバン・リズムを鮮明に打ち出した、若き若れる巨匠の初々しい姿を堪能して下さい。

ディスコ・カランバ CRACD-307

¥2,850(税込)

2007/2/18 Release



ジャズ・パタ+テマ・デ・チャカ-1

チューチョ・バルデース・トリオ

キューバン・ジャズの巨匠チューチョ・バルデースが1972年に発表した意欲作にして異色作で、後に結成されるスーパー・ファンキー・ラテン・バンド『イラケレ』をタイトルにしたナンバーも収録されたアルバム【ジャズ・パタ】の全曲と、イラケレで人気絶頂だった1982年にトリオという小編成で発表された話題を呼んだ【テマ・デ・チャカ】から1曲を除いた5曲をカプリングした貴重な復刻アルバムが登場です。なかでも【ジャズ・パタ】は、イラケレ結成前夜を伝える貴重な録音で、アナログ盤も高値で取り引きされています。

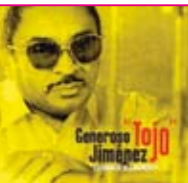
ディスコ・カランバ CRACD-308

¥2,835(税込)

2007/2/18 Release

新連載

text by 伊藤八十八



トロンボーン・マハデーロ+リトゥモ

ヘネロソ・“トボ”・ヒメネス

ベニー・モレー楽団やローロ・マルティネスの楽団で活躍してきたトロンボーン奏者、トホことヘネロソ・ヒメネス。彼はアレクサンダー・ヒガンテ（ビッグ・バンド）のマンボ・テイストのエキサイティングな編曲も彼の手によるものが多くあります。本CDは、彼が1965年に録音した、ベニー・モレー楽団スタイルを再現した興味深いアルバム【トロンボーン・マハデーロ】と1960年にクバネイ・レーベルに録音したアルバム【リトゥモ】を2in1したお得な復刻アルバムです。オリジナル・アナログが高価で売買されている【トロンボーン・マハデーロ】の方は、パーカッション、ピアノ、ベースといった基本編成に、トランペットx4、トロンボーンx5、サクソフーンx5という超豪華なプラスがスウィング！その上を縦横無尽にトロンボーンが飛び回る、最高にデスカルガ（ジャム・セッション）なアルバムです。

ディスコ・カランバ
CRACD-309
¥2,835(税込)

2007/2/18
Release



シングル・コレクション

オマラ・ポルトゥオン

ワールドやラテン・ファンにはもう何の説明も不要だと思われる、世界的な女性歌手オマラ・ポルトゥオン。あのブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブで紅一点の存在としても世界中の音楽ファンに名を知られることとなったのは記憶に新しいところです。彼女は、やはり大歌手エレナ・ブルケなどと結成した女声コーラス・グループ、クアルテト・ラス・デ・アイダで人気を掴み、そのグループには1960年代前半まで参加していました。そして1967年から、ソロ歌手として本格的にデビューし、現在に至っています。本編集アルバムは、ソロに転向した1967年から人気を不動のものとした若き日に、シングル盤として発売した録音群を中心に、コンピレーション用に録音した音源を加えたアルバムです。少なくとも4曲は発音CD復刻と思われる貴重な音源も含まれています。若いときから、自由奔放に歌われる確かな技術と、比類希な感情表現を併せ持っていた天才の姿が確認できます。

ディスコ・カランバ
CRACD-235
¥2,835(税込)

2007/2/18
Release



In The Morning BEST

V.A.

大切な毎日を音楽で始める。大好評「朝聴くCD」、シリーズ初のベスト・セレクション！
Morning Music for Weekday & Weekend

2枚組 40曲収録

デズリー、アース・ウィンド&ファイアー etc.

ソニー・ミュージックダイレクト
MHCP-1300/1301
¥3,570(税込)

2007/6/7
Release



世界はときどき美しい-Music Anthology-

V.A.

映画『世界はときどき美しい』を彩る珠玉の楽曲によるコンピレーション♪人気ソプラノ歌手・鈴木麗江が歌う主題歌「月に寄せる歌」収録豪華ブックレット封入

01. 夢の鼓動は小さな命に響いて (フェビアン・レザ・パネ)
02. 紙ふうせん (井野信義) / 03. Nanjaの春 (太田恵理)
04. 渡れた太陽 (ペトルブルグスキー) / 05. 竹に雀〜千鳥 (お囃子)
06. 想いの届く日 (ガルデル) / 07. anohi (栗川敬基)
08. 遙かなる旅路II (フェビアン・レザ・パネ)
09. 月に寄せる歌〜歌劇「ルサルカ」より (ドヴォルザーク)
- M-2. Licensed by KING RECORD Co., Ltd.
- M-9. Licensed by TOSHIBA-EMI LTD.

オーマゴトキ
OMCA-1061
¥2,700(税込)

2007/2/21
Release

M-1&M8: フェビアン・レザ・パネ / M-2: 井野信義+レスター・ボウイ / M-3: 太田恵理 / M-4: 大塚ワタル+佐藤秀明 / M-5: 藤田昌巳+長谷川信臣 / M-6: 小川紀美代+宮野弘紀+吉野弘志 / M-7: 黒田京子トリオ (栗川敬基・太田恵理・黒田京子) / M-9: 鈴木麗江



cafe au lait bowl

organs cafe

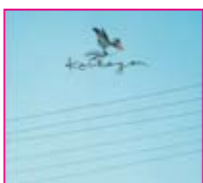
3部作アルバム『鍵』『水』『樹』からセレクトされた楽曲に新たに書き下ろした5曲を収録した5thアルバム。ライブでもお馴染みの代表的な楽曲や最近のジャズ寄りのアプローチからは暖かさや心地良さが伝わってくる。

01. ラディラ〜 will do / 02. 鍵
03. a・コヒー / 04. あくび
05. Love... ~ friend ~ / 06. パンドラの中で
07. Oasis / 08. ゆっくり
09. つぼみ / 10. からくり
11. ラモイノタケ / 12. 箱〜こいねがー
13. 心かわるもの / 14. はじまり
15. 今日の日 / 16. ~ a four leaf clover ~

bouncy records
LTCA-00045
¥2,940(税込)

2007/1/17
Release

加藤沙香菜 (Vo)
林良 (Key)



「開放弦」オリジナル・サウンドトラック

渡辺香津美

アコースティック・シリーズ「ギター・ルネッサンス」の延長線上に生まれた、日本ジャズギタリスト界のトッププレイヤー渡辺香津美が、舞台「開放弦」のために全曲書き下ろしたオリジナル・サウンドトラック！アコースティックからエレキ、果てはギターシンセまでを用い、シンプルなアコースティックナンバーから逆きのギター、果てはテクニクのエレキサウンドまでを奏でる、まさに奥深い香津美ワールドが楽しめる特異な一枚！！

01. オープン・ストリングス / 02. クラッシュ 1
03. クラッシュ 2 / 04. モンタズ・ソング
05. 浮きクラゲ / 06. 愛の行方
07. オープン・ストリングス 2 / 08. LUV SONG 1
09. LUV SONG 2 / 10. スーパー・ヒット
11. オープン・ストリングス Long ver.
12. モンタズ・ソング Long ver.
13. 愛の行方 Long ver. / 14. LUV SONG Long ver.

CUBE
QBIX-22
¥1,800(税込)

2007/2/14
Release

全作曲／編曲／演奏／エンジニア：渡辺香津美



THE CORONA「淡々と煌々」 RMX baskets

THE CORONA

「ラテン・ミクスチャーバンド、ザ・コロナの名曲「淡々と煌々」を大胆にリミックス！メンバー古川尚篤によるセルフカバーも特別収録」

01. 「淡々と煌々」 DJ Mitsu the Beats remix
02. 「淡々と煌々」 CALM remix
03. 「淡々と煌々」 GOMA remix
04. 「淡々と煌々」 古川尚篤 recover

Starman Records
DDCS-4016
¥1,300(税込)

2007/2/21
Release

DJ Mitsu the Beats / CALM / GOMA
古川尚篤 (THE CORONA)



PRIMER ENCUENTRO

Anima Mundi (Vazquez-Yoshigaki project)

01. TAL VEZ LLUEVA it may rain
02. RECONSTRUCCION rebuilding
03. EL TRANCE DEL ALMUERZO trance of having lunch
04. EN FOCO focused
05. EN JULIANA finely chopped / in Juliana
06. SALIDA DE CAMIONES trucks exit
07. BAILE EN EL PLAYON party-dance on the parking lot
08. SIETE HOJAS FLOTANDO seven floating leaves
09. EN UNA GOTTA QUE GIRA inside a rolling drop

ewe
EWGL 0010
¥2,500(税込)

2007/3/14
Release

Uchihasi Kazuhisa/guitar,daxophone effects on1,2,4,8
GOMA/dj/druidoo on 3,7,9
Alejandro Franco/piano,key,sitar,wood flute,voice,dance on 1,2,3,4,5,6,7,8
Okabe Yoichi/conga,bougarbou,tinbau,shaker,triangl,caxixi,cymbals,talking drum,beans,etc. on 1,2,3,4,5,6,7,8
Takara Kumiko/vibraphone,antique cymbals,bass marimba,slit drum,engelhart,shaker,kalimba,tube horn,etc. on all trucks
Yoshigaki Yasuhiro/drums,surdo,tambourin,talking drum,cymbals,bells, thinking bowl,berimbau,kalimba,caxixi,shaker,toys,voice,etc. on all trucks
Santiago Vazquez/cajon,tarla,bombotambourin,kalimba,berimbau,gong,sthinking bowls,slit drum,caxixi,toys,horn,plant,voice,etc. on all trucks

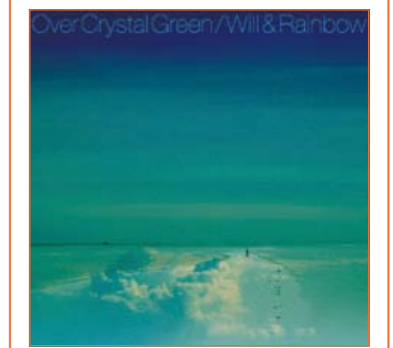
その時、マイケルは突然現われた...

1月14日早朝、突然電話のベルが鳴った。ニューヨークの Kiyoko さんからだった。「マイケル・ブレッカーが亡くなりました」一瞬、頭の中が真っ白になった。この一年半あまり、マイケルは演奏活動を中止していた。白血病の治療に専念するためだった。覚悟してはいたが、こんなに急に、悲しい別れが来るとは思いもなかった。昨年の6月に、カーネギー・ホールでおこなわれた JVC ジャズ・フェスティバル・ニューヨークのコンサートに突然現われ、元気に演奏を聞かせてくれたからだ。その夜はハービー・ハンコック&フレンズが総出演するという豪華プログラムだった。サプライズ・ゲストが現われたのは、オープニング・トリオ（ロン・カーター/ベース、ジャック・デジョネット/ドラムス）による最後の〈ワン・フィンガー・スナップ〉の場面だった。テナー・サクソックスを持った長身の男が舞台を一周する。場内がざわめく。それがマイケルだと分かるやいなや、スタンディング・オベーション、そして拍手の嵐に変わったのが昨日のこのように思い出される。治療薬の副作用か、顔色が紅潮し、少しむくんではいたが、マイケル節のソロを朗々と披露してくれた。奇跡を願っていたのだが、まさか、ラスト・パ

フォーマンスになろうとは…。マイケルとの最初の出会いも突然だった。1976年5月、ニューヨークの23丁目にあったヴァンガード・スタジオでウィル&レインボーのレコーディングをしていた。メンバーはアトランタから来た新進気鋭のキーボード奏者ウィル・ブルウェアをリーダーに、その当時ニューヨークで人気が出始めたグループ“スタップ”のメンバー。それにアルト・サクソのデイヴィッド・サンボーンという興味津々の組み合わせだった。ところが、セッションが始まって何時間経っても、サンボーンはついにショウアップしなかった。サクソがいなければ話にならない。しかし、ツイてる時は不思議なもので、嘘のような話が本当になる。なんと、スタジオの前をサクソを持ったマイケル・ブレッカーが通り過ぎるではないか。急速、加わってもらって誕生したのが、フュージョンの名盤『クリスタル・グリーン』である。そして、その四半世紀後に続編の『オーヴァー・クリスタル・グリーン』の話を持ちかけた時も、マイケルはそれまでのスタイルとは、まったく違う新しい奏法で聴くものをワクワクさせてくれた。そのさわやかな独自の演奏は彼の人柄が

らきていたようにも思う。スタジオの中でも、あるいはアッパー・ウェスト・サイドの街角にあるカフェで会った時でも、笑顔を絶やさず、驕ることなく、常にやさしく接してくれたマイケル。あなたが残した素晴らしい作品の数々は、世界中の音楽を愛する人々の心の中に永遠に生き続けるだろう。ありがとう…そして、さようなら！

Over Crystal Green Will&Rainbow



01. A Song For You
 02. I'll Fly Away
 03. Seascape
 04. Appearance
 05. Don't Let Me Be Lonely Tonight
 06. Scenery
 07. Waltz For Debby
 08. Voyage
 09. Bells
- Eighty-Eight's VRCL-6001 ¥3,045(税込)
2002/05/22 RELEASE

【いとう・やそはち】
1946年岐阜県生まれ。早稲田大学を卒業後、日本フォノグラムに入社。イースト・ウィンド・レーベルを設立し、ザ・グレート・ジャズ・トリオ、渡辺貞夫、日野皓正らをプロデュース。CBS / SONY 時代は洋楽企画制作の一方で、ザ・スクエア、マリン、笠井紀美子ら、国内 JAZZ / FUSION 系アーティストの制作も担当。のちにケイ・コリーや TOKU を育成、2001年にはエイティ・エイト・レーベルを立ち上げる。現在に至るまでのアルバム・プロデュース作品は国内外を合わせて約450点、洋楽編成時代に担当した作品は優に3,000点を超えるという。

レーベルを超えたコンビ、マイケル・ブレッカー-遠藤隆『ソング・フォー・ユー・ウィル・アンド・レインボー』(VRCL-18003)、来る3月21日にリリース!

距離をとともども 測りがたしも

text by 末次安里 (本誌編集長)

あれは一昨年それとも一昨々年の現象だったろうか。突如「1968年問題」といふのが浮上し、少なからぬ数の関連本が同時多発的に刊行され、大型書店に平積みされていた。が、今日に至るまでじぶんの書棚に「1968本」が一冊たりとも飾られたコトはない。じぶんにとっては「1972年問題」のほうがより切実であり、いずれは「総括」したい対象の季節であるからだ。そんな想いに捕らわれたのがいったいつの頃だったのかはもう忘れたが、ある時期からどんな本を読んでも任意な新聞記事を拾っていても「1972」の文字を見つけると自然に眼が吸い寄せられるようになり、メモを取る習慣が定着した。既に文庫化されている坪内祐三著『一九七二』の存在は「諸君!」連載時の論考を見落とし、親本発売直前に人から教えられて発売日を心待ちにして読んだ。「先を越された」苦悶感は拭えなかったが、やはり「わが1972年問題」とは視点が微妙に違っていたので労作への敬意を表しながらも正直、妙な安堵感も覚えた。坪内は同年の『びあ』創刊をかなり重要視しているが、じぶんにとってそれは決して「切実」ではない。では、わが問題の基調はどこにあるのかといえば——ザ・バンドに『ロ

ック・オブ・エイジズ(イン・コンサート)』といふアルバムがある。これは1971年大晦日から翌年1月1日にかけての「ニュー・イヤーズ・イヴ・コンサート」(@NY:アカデミー・オブ・ミュージック)の模様を収録した2枚組である。わが知覚のドアをこじ開け、件の一年間の意味を考察するのにこれほど相応しいオープニング音楽もないだろう。結論を先に記せば、ザ・バンドが越年を祝ったその

丁度1年後、小菅の東京拘置所内の独房で一人の男が首吊り自殺で自ら生涯を閉じた。連合赤軍の森恒夫である。1972年はいまでもなく「浅間山荘事件」に象徴される一年であるが、この二つの出来事に挟まれた365日間は当時(高校2~3年で)「薫くん」にわが身を重ねていたじぶんには「それから」を考える際には避けて通れない要の季節のようである。



ザ・バンド/ロック・オブ・エイジズ



ウェザー・リポート/ライブ・イン・トーキョー



村上“ボンタ”秀一著 『自暴自伝』 (文春文庫+PLUS)

先月号でも触れたが06/07といふ先の越年は「川上弘美月間」とばかりに彼女の著作に耽溺していた。前号の校了後、文庫版の川上本を読了すると「気分転換に音楽本でも」と、村上“ボンタ”秀一の『自暴自伝』を読み始めたらこれが想定値の何倍も面白く徹夜で奥付に至ったが、やはり刷り込まれた箇所は「赤い鳥参加」の「72年」だった。次いでSan Ma Meng著『ザ・ゴールデン・カップス ワンモアタイム』にコマを進めたのだが、やっぱカップスの存在感は文字で再現されても圧倒的!! ミュージシャンといふ種族に寄せる憧憬のわが水準原点は「カップス以降もカップスにあり」の不変性を読みながら再認識した。彼らはザ・バンドの代表曲のひとつ「ザ・ウェイト」もいち早くカヴァーしていたが、前述したNY越年ライブの翌日に当たる1月2日、われらがザ・ゴールデン・カップスは返還直前の沖縄でライブ中の会場火災に遭遇して楽器もほぼ全焼…それを機に解散の憂き目に会っている。といふ事実は以前



San Ma Meng 著 『ザ・ゴールデン・カップス ワンモアタイム』 (小学館)



久能 靖著 『浅間山荘事件の真実』 (河出書房新社)

から知っていたけれども、今は亡きアイ高野の証言談によればなぜか当日に限って、ふだんのステージではまず歌わない「長い髪の少女」を「特別にやる」とデイヴ平尾が言い出したとか。しかも火災発生は同曲の演奏中だったといふ妙な因縁話が同書の終章に置かれていたので「1972年の郷愁」がわが胸中で燃りはじめ、今度は(事件当時、日テレのアナだった)久能 靖著『浅間山荘事件の真実』を読む。今回ここに掲載したジャケット群は「1972年作品」の一部だが、いずれも読書中のBGMとして仕事場に流れていたものばかりである。今月の小沼純一コラムはウェザー・リポートのBOXセットを取り上げていたが、彼らの『ライブ・イン・トーキョー』は1972年1月13日の渋谷公会堂における実況録音盤。同月発表の1stアルバムと相前後しての初来日だったが、その衝撃のWRデビュー作で完全に打ちのめされてジャズにより深入りしたじぶんの記憶の耳鳴りはいまだに響きを止めてはいない。月刊『短歌』の元編



三枝昂之歌集 『やさしき志士達の世界へ』 (反措定叢書)



『非時と廃墟そして鏡 間章ライナーノーツ[1972-1979]』 (深夜叢書社)

集者だった富士田彦が「映像+定型詩」を謳う個人誌『雁』を創刊したのが「一九七一年と七二年の交」、現代歌人文庫の一冊『富士田彦短歌論集』の記述によれば「内田魯庵ではないが『くれの廿八日』に出来上がって、発行日は一月十日だった」から「交」だといふ。その創刊号を飾った印象的な歌群が、のちの歌集『やさしき志士達の世界へ』の骨格となる三枝昂之の一連作。その冒頭にはこんな一首が、次いでもう一首が並んで置かれていた。

まみなみの岡井隆へ 赤軍の九人へ 地中海のカミュへ

ゆるやかに揺れる君からぼくまでの距離をとともども測りがたしも

さっき想うところがあってジョン・マクラフリン&カルロス・サンタナの『魂の兄弟たち』のCDを出してきて確認したら、帯には「1971年録音」と表記されているのに、ライナーノーツでは「1972年11月~73年5月録音」と書いてある。真相はあとでゆっくり調べるとしてもじぶんの記憶の海図のなかでは彼らの真摯な音楽も「1972年問題」と共振している——いま、筆を置こうと思って一瞬書棚のほうをふり向いたら、一冊の書籍の副題が眼に飛び込んできた。書名は『非時と廃墟そして鏡 間章ライナーノーツ[1972-1979]』、彼の初のライナー担当とされる巻頭文「ジャズと季節についてのメモ……●ラジオのように/ブリジット・フォンテーヌ」の日付けは1972年2月と記されている。脱稿はかの銃撃戦後、あるいは直前か!?

Jazz Today®

発行人: 鯉沼利成 jazz today 35号
編集人: 末次安里 表紙画: タジマヤスタカ
デザイン: Factory Jam (岡本義憲&三村洋一)

制作: jazz todayプロジェクト
〒107-0062 東京都港区南青山3-4-7-402
専用電話: 03-3746-8760 e-mail: sue@image.ocn.ne.jp

ブログ版 編集長日誌 公開中! <http://blog.goo.ne.jp/jazztoday/>

ハンク・ジョーンズに 会ったんだ!

最終回

現在・過去・未来

聞き手：JT（本誌編集長）



JT：参加アルバムの総数は「本人も把握できない(笑)」とのコトですが、ハンクさん御自身が所持していないもので捜し求めている作品はありますか？

HJ：ベニー・グッドマンの所でやっていた時のものが一枚あるね。たぶんベニー本人は知っていたらさうだけれども、我々バンドのメンバーは吹き込みを知らされていない状況で録った音源というのがあった。それから数年後、ある人から「こういうアルバムがあったよね？」と聞かれて「えっ、あれは録られていたの!？」と驚いた。録ったコトが悪い云々ではなくて、そんなものが存在すること自体を知らなかったわけだから(笑)、それは機会があれば聴いてみたいと思うよね。というのもメンバーはレコーディングされているという事実を意識せずにやっていた演奏でもあるから、興味深いよね。

JT：それはもちろんライブ録音ですね？

HJ：そう、ライブ盤だと記憶しているな。スタジオに入っていれば、録音の可能性は多少なりとも意識できるからね(笑)。

JT：日本でも人気の高い『サムシン・エルス』に関して、何か逸話があればお聞かせください。

HJ：正直、どんなレコーディングでも何かしら光るものが絶対に一箇所はあるから甲乙はつけがたいけれども、やはり皆さん、『サムシン・エルス』については大変興味を持たれているようだね。そうだなあ、あの日は本当にリラックスして、ストレスが皆無だったコトを今でも憶えているよね。もちろん、いい意味で緊張感が漂っていたんだけど、ガチガチになってしまうという感じではなくて、それがあのアルバムの良さに繋がったと思うんだ。そうそう、当時、僕らはアート・ブレイキーのコトを「ブー・ヘイデン」というあだ名で呼んでいたんだよね(笑)。どうしてそういうあだ名がついたのかは忘れちゃったけど、皆でそう呼んでいたんだ(笑)。もちろん、彼が素晴らしいバンドリーダーだったことは皆さんよくご存知だろうけれども、今キラ星の如く活躍している人たちの多くはアート・ブレイキーのバンドを経てという流れがあるので、彼は本当に「見つける

という才能があったよね。

JT：ちなみにハンクさんと親しい方たちの間でのあだ名はあるんですか？

HJ：実際、僕の本名は「ヘンリー」なんだけど、父がヘンリーだから本当は「ヘンリー・ジョーンズ Jr.」なんだけど誰もそうは呼ばなかったな(笑)。

JT：父子間の交流ぶりはどんなものでしたか？

HJ：父はピューリタンまでは行かないにせよ、本当に敬虔なクリスチャンで当然、お酒は飲まない、タバコは吸わないという厳格な面を持っていたんだ。トランプでさえも「ギャンブルに繋がるから」と家の中でやるコトを許さなかったからね。ダイスは言うに及ばず、家に持ち込むことも禁じていたんだ。で、日曜日にジャズを演奏することも強く反対していたんだよね。

JT：ああ、そうですか。

HJ：今でも憶えているのはある日、地元ポンティアックのダンス会場で僕が演奏していたら23時45分に父が来て、ステージから引き摺り下ろされたんだ(笑)。「あと15分の日曜日になっちゃうから、自分の息子が日曜日にジャズをやるなんてまかりならん!」というわけさ。本当はどんな音楽だって何が悪いとかはないと思うんだけど、それが使われる場所によって人の印象というのは違ってくるという側面もあるからね。

JT：確かに…。

HJ：父もジャズ自体が反対というわけではなくて、「日曜日にジャズをやる」というコトが堪えられなかったみたいだね。どうもジャズの中には“なんか悪い所へ引きずり込むような何か”がある、というふうに思っていた節があるから。「日曜日には演奏してほしいくない」とか「教会では演奏してほしくない」という想いがあったみたいだね。まあ、父がジャズというものを知った時代にはわりとかがわしい場所で演奏させる機会が多かったためにそう思い込んでいたんだと思うよ。

JT：世代間の相違ですね。

HJ：なんだけど、じつは数年前に当の教会側からの依頼で、僕は教会内のジャズ・コンサートをやったことがあるんだよ(笑)。それはガチガチのジャズではなかったけれども、教会側からのリクエストだったんだ。で、もし、父がそのことを知ったら墓場から出てきて怒られるんじゃないかって(笑)、自分もそんな父の教えで育ったから正直、演奏しながらも教会でやっている事実にも多少の戸惑いがあったんだよね(笑)。

JT：150歳宣言をしているハンクにとっては今は折り返し直後くらいでしょうか(笑)、それでも「昔は弾き方が若かったな」と思うコトはありますか？

HJ：いや、最近では150歳ではなく「200歳まで」と変更したんだよ(笑)。実際、まだまだ子供だからね。今でも自分は未熟だと思し、自分で決めた「こういう所にたどり着きたいな」という目標にはまだまだ全然到達していないなと思っているからね。もちろん若い頃の演奏を聴くと未熟なのは当然で、誰だってゼロから始めるわけだから…目標にたどり着けるかどうかは分からないし、ただ、あくまでも自分が定めた目標に向かって皆が進んでいっているのは事実で、僕もあと110数年間のうちにそこまで到達できるかどうかはまだ分からないんだけど、ただ、そこに到達したいと思って一歩一歩進むだけだね。

JT：ジャズが一番光り輝いていた時代の生き証人であるハンクさんから観て、21世紀のアメリカのジャズ状況はどう映っていますか？

HJ：たとえ21世紀になってもジャズという音楽はたえず、変化し進化しつづけている音楽だと思うんだ。過去の流れを例にとっても、何年経てば「ああ、ここここが違っているね」というのが指摘できても、日々の行ないというか現在進行形の音楽に対して、ピンポイントで何がどう変わっているということは言えないと思うんだ。たとえば20年前のアルバムを聴いてみる。するとやはりそこはかとなくあれ、アレンジなりスタイルなりがやはり変化しているというのは皆さんも気づくはずだね。ジャズというのはそういうものだと思う。過去にそう流れてきたというコトは、未来もやはりそういうふうに変わってゆくものだと僕は思っているね。もちろん未来に何がどうなるかは誰も言えないわけだけど、そういういい所を踏襲して、その時代に合ったかたちで変化してゆくと思うよ。

JT：長時間に渡っての貴重なお話の数々、大変ありがとうございました。

HJ：こちらこそ。あなたも長生きしなごやダメだよ(笑)。

